

10

137

|      |     |   |    |   |   |
|------|-----|---|----|---|---|
| 東泉園書 |     |   |    |   |   |
| 册    | 号   | 架 | 函  | 厨 | 類 |
|      | 137 | 1 | 10 |   |   |

欽定四庫全書

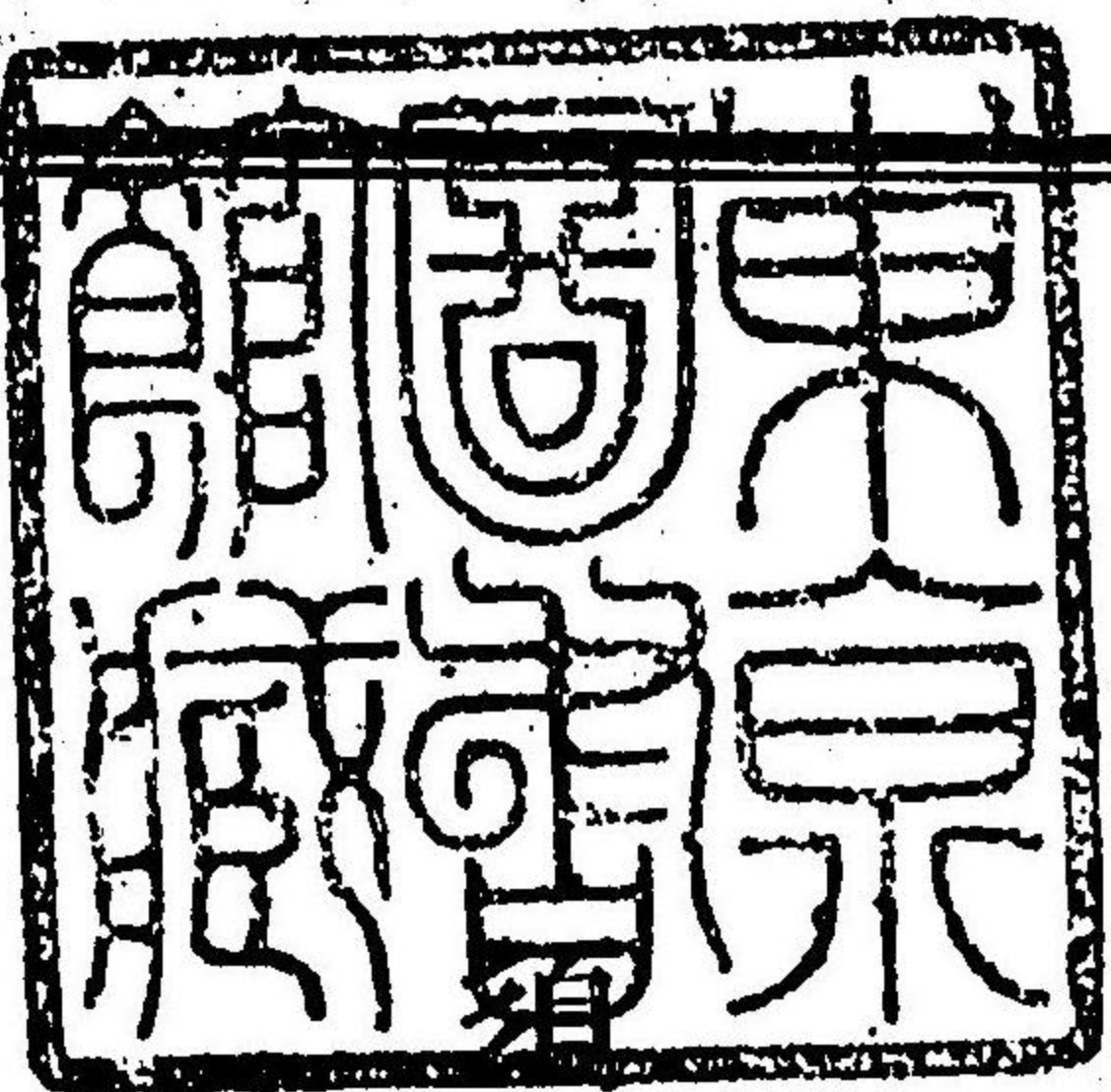
北清堂

下

明治二十年二月七日内務省交付令

# 府縣鄉村社祭典式卷之下

田道間 北垣 彌 謹編



## 知 之 部

## 神 部 之 條

凡、臨時大祭の節は。近傍の神官を雇ひ神部として。副齋主。祓主。誓主。典令。贊者。大麻司。搦湯司。神饌司。陪膳。手長。琴師。水取。後取。等々役を務しむべし。然ども小社の例祭。祈年。新嘗。或は臨時の小祭などよは。畧して氏子惣代。又は例

祭當番の人等と。遣ふもよかるべし

### 齋戒之條

凡、神事には齋戒漢籍齋戒之註在洗と第一の要務とす。令義

解、凡散齋之内諸司理事如舊。不得予、褻、問、病謂有重病者不

之、預、祭、食、寗、亦、不、判、刑、殺、不、決、罰、罪、人、不、作、音、樂。謂不作絲

也、不、預、穢、惡、之、事。謂穢惡者不淨之物、鬼神所惡也 致、齋、唯、祭、祀、事、得、行、自、餘、

悉、斷。其、致、齋、前、後、兼、為、散、齋。凡、一、月、齋、為、大、祀。即此條稱大齋者皆散齋也。

唯、於、一、日、齋、更、無、散、齋。其、三、日、齋、為、中、祀、一、日、齋、為、小、祀、と、あ

り。散、齋、之、内、諸、司、理、事、如、舊、と、あ、る、は、七、種、の、禁、忌、を、慎、み

て、其、余、の、事、は、平、常、の、如、く、よ、し、て、行、ふ、こ、と、を、云、お、り。七種

の禁忌とハ予 散齋を疎忌とて。致齋を真忌也。其

致齋は唯祭祀事得行自餘悉断とあるは。上の七種の禁

忌を慎え固より其餘百事萬端悉く皆廢して。仮令私用

ありとも齋外の人と同席會話せずして。唯神事のみ執

行ふと云あり。○一月の齋は。中三日を致齋具として。

前後を散齋疎とし。三日の齋は。中一日を致齋とて。

前後を散齋せし。一日の齋は。散齋なし。○嚴重齋大祭遷

の中は。別室を清めて齋會とし。注連を引延へ。門勝を建。

沐浴水。用火。鑽火して。衣類を改め。齋舎より起臥し。齋外の人

と同座せず。廁に入らば浴し。尿は神前より出むは更

よ浴すべし。○門勝の標柱。又の建札を用ゆ。其書法の「神事中觸穢服者及僧尼、輩不可入來」また「不許觸穢服者及僧尼等入。門内」または「神事也重輕服僧尼不淨、輩不可入矣」かとあるべし。○鑽火の事は。玉葉の神宮之習不用火打用。火切かど見ゆる如く。嚴重齋よ火切白。古木の板よて造る。凡長さ二尺五寸。厚さ八分位にして。表面には火切杵の先の入べき位な。丸き穴を數ヶ所に穿ち置くなり。穴の深さ火切杵杵或の字津木又の竹にて造る。凡長さ二尺凡五六分位。五寸。太さの周圍ハ一寸三分位にして。先を尖らし置也皮火口杵の皮を打和らけて。日を用ひて。硫黄木燂硝入の火口を用ひず。其鑽火の仕方。二人よて一人の火切白の穴よ。火切杵の先を入れて。錐を揉込込如くよして。頻

りよ揉めは煙出す。此時手を緩むべからど。一人の煙の出る所の穴よ。皮火口をさしよせ。氣もく吹つけ。火移らば皮火口を多分たあそへて。夫より薪よ移すべし

### 神殿裝飾之條

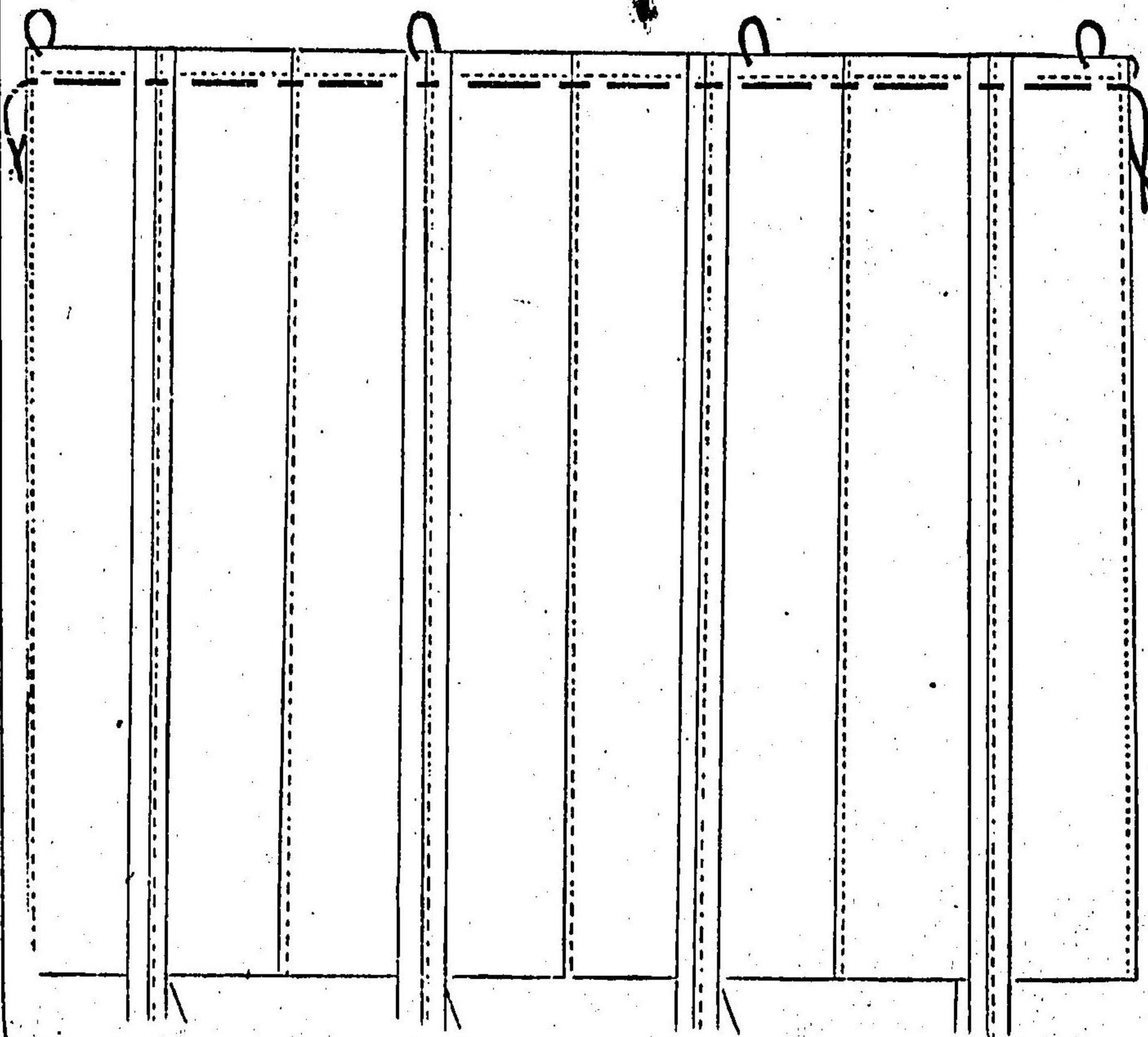
附新殿祭  
宮門祭

凡、神殿。拜殿。神饌舍。及社内の掃除等。前日又ハ二三日前には勿論の事ありしが。神殿裝飾の儀ハ。神社祭式よ當日早且神官神殿を裝飾すとゆれば。本日早朝よ神殿を裝飾すと本儀よ思とるればなり。また前日よ裝飾

するとも何の咎あらむ○神殿の裝飾と云ハ内陳うちぢんニ壁かべ代しろ幌ぼろ翠簾すいれんを垂れ。神殿の周圍に幕まくらをはる等の事あり○新殿祭しんてんさいハ四隅の柱はしらニ木綿きわた附の柳やなぎを結建むすむすて。正面まへニ注連しゆれんを引ひき。殿前てんぜんニ齋竹さいちくを建たつべし○官門祭くわんもんさいハ門前かどニ祭場まつばを設たげ。門の中央ちゆうじやうニ薦いすを鋪ふ。高案たかあんを立て神饌しんけんの置座おきざとも。其餘その他木綿きわた柳やなぎ注連しゆれん齋竹さいちく等ら。新殿祭しんてんさいニ倣なまひて裝飾しやくしすべし○三種さんしゆ神寶しんぼあれば例祭れいさい。新殿祭しんてんさい。遷座式せんざしき等の節ふしニ。之と殿前てんぜんニ飾かざるべし

### 壁代

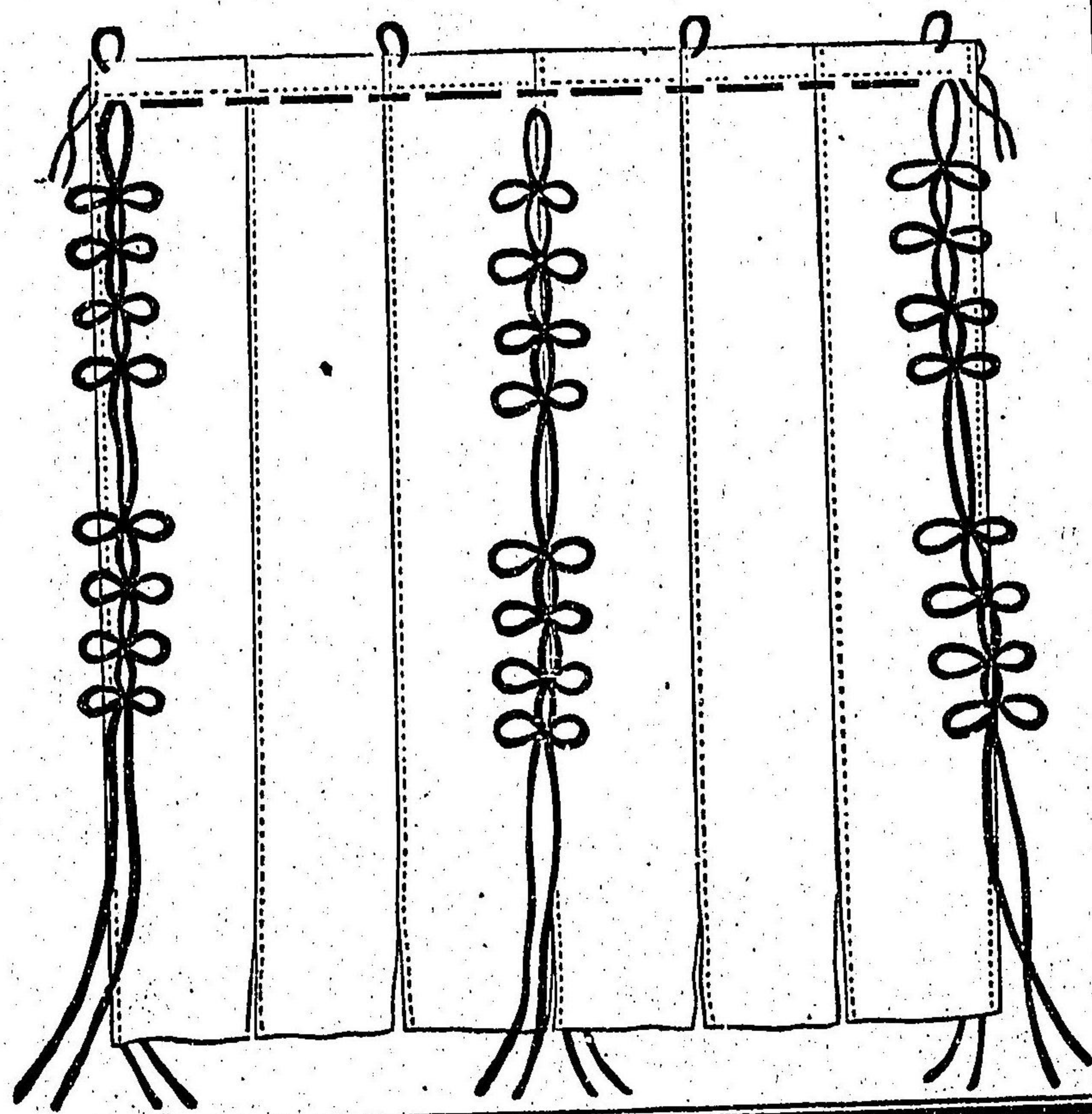
白しろ綾あや。又ハ絹きぬ。或ハ布ぬい。又ハ造つくり。同シ。裏うらニ付つけ。表裏うらニ綾あや。又ハ絹きぬ。或ハ布ぬい。何なにノモ同おなシ物ものナリ。紐ひもトス。丈幅ぢやうはくハ内陣うちぢんノ廣ひろ狭せまニ從したがフベシ。然しかトモ垂たり一尺位いちせつゝち。餘あまル程ほどニスベシ。○是ハ御正躰ごせいだうノ後のちニ懸かへルナリ



此所ニ繪え、棹しやくヲ入いレ上うへノ輪わヲ折をリ懸かクニ懸かクニ

幌

品物ハ壁代ニ同  
表裏ニハ絹。又ハ  
木綿ノ組紐ヲ垂  
ルベシ  
丈幅ハ上ニ同  
○是ハ内陣ノ正  
面翠簾ノ内ニ懸  
ルナリ



神寶

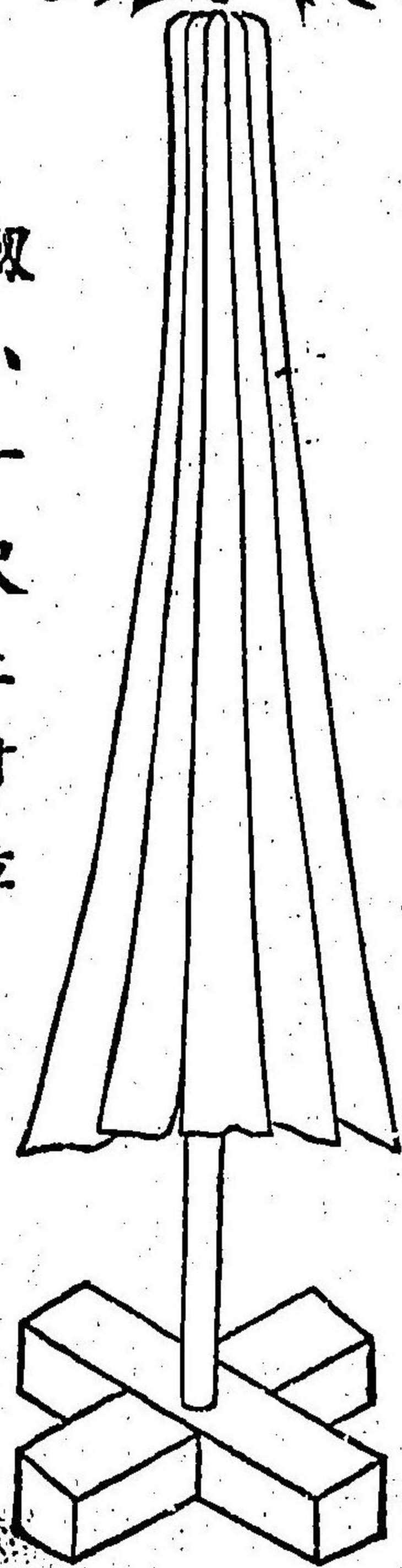
ニ具本柳

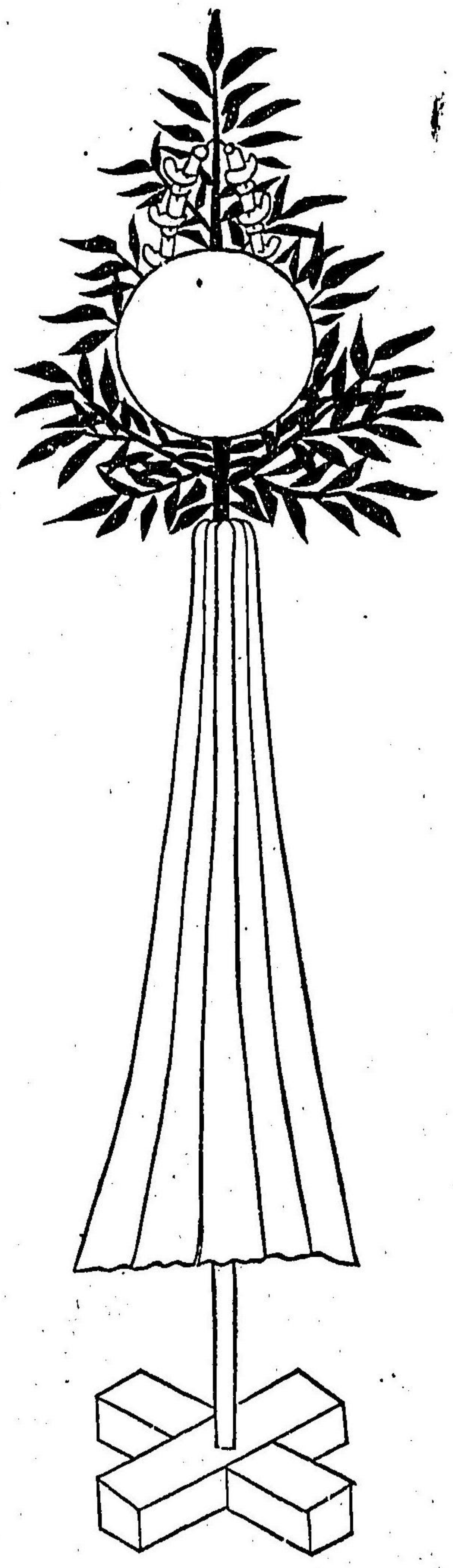
叙チ白絹ニ納メ大和錦ノ袋コ入レ。真紅ノ組紐  
ニテ柳ニ懸ケ。下ニ五色ノ絹ヲ垂レ。是チ神前ノ  
右傍左ニ建テ。八尺瓊曲玉ヲ真紅ノ紐ニ貫通シ。  
柳ノ上ニ懸ケ。次ニ鏡ヲ紐コテ結付。下ニ五色ノ  
絹ヲ垂レ。是チ神前ノ左傍右ニ建ツベシ。是チ三  
種ノ神寶ト云フ。此ハ例祭新殿祭遷座式等ノ飾。  
拜殿ニ飾ルベシ



高丈ハ拜殿ノ適宜ニスベシ

叙ハ一尺二寸位



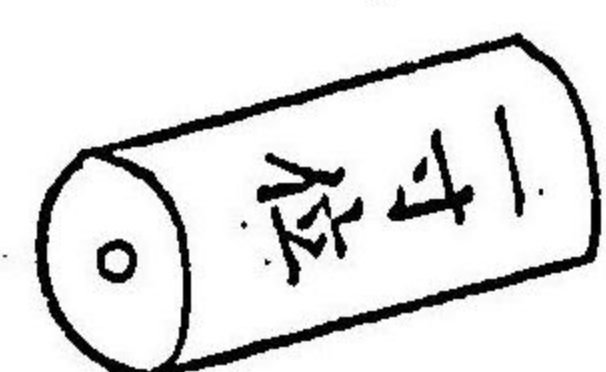
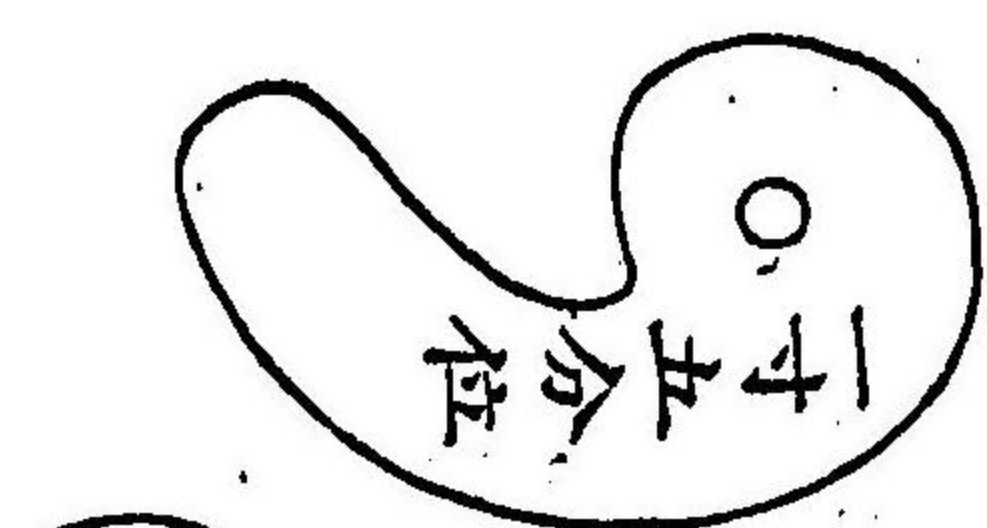


八尺瓊曲玉

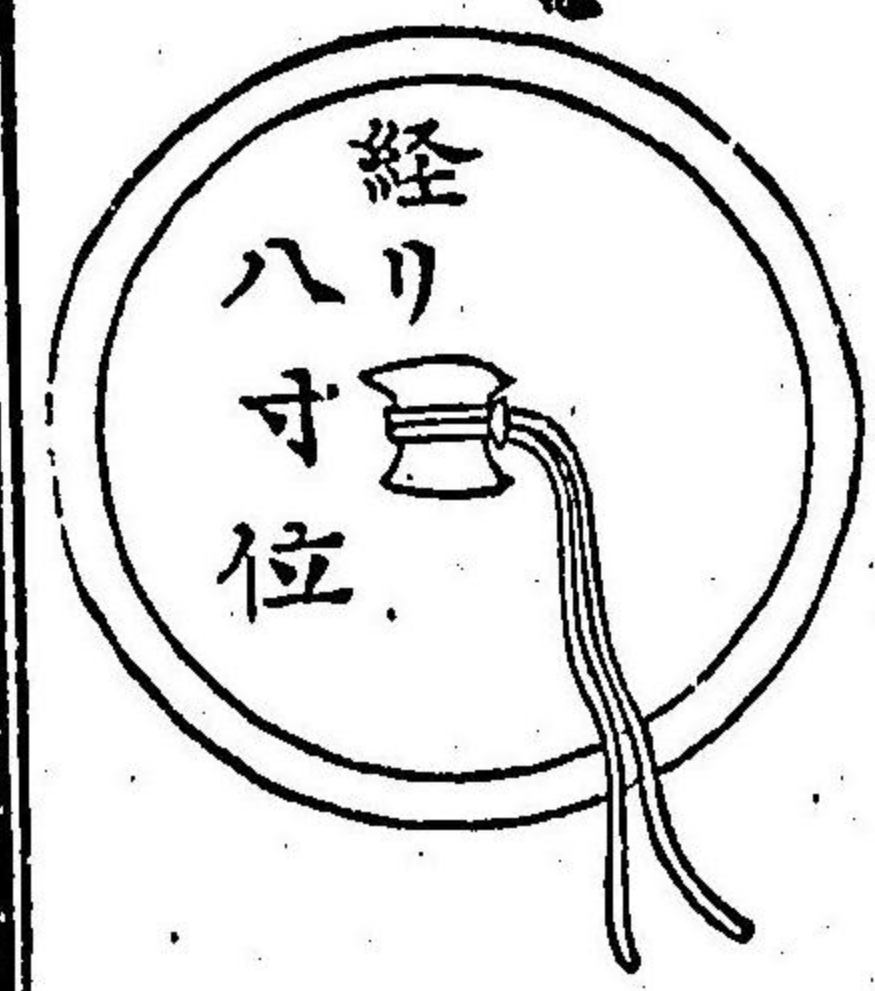
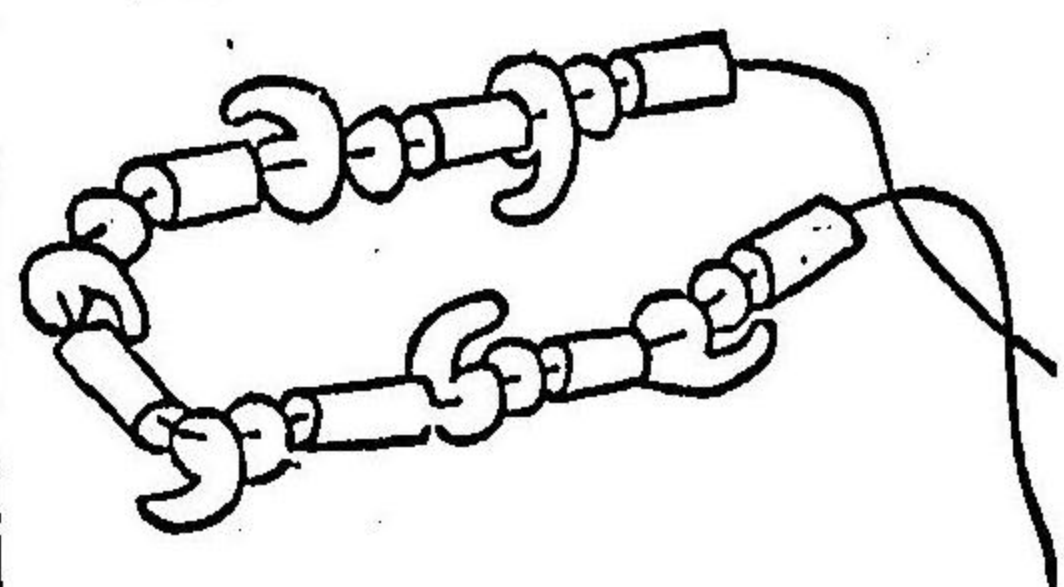
水晶或ハ瑪瑙又ハ鍊物  
木等ニテ造ルモ可ナリ  
數ハ世世適宜ニスベシ

鏡

裏ニ圖ノ如  
キ紐付アリ



眞紅ノ紐  
ニ又キ通シ  
タル所ノ圖



神饌物之條

凡、神饌ノ當日神饌所。若一神饌所なき社ハ便宜の所よ於  
て。式の臺數よ從ひ調置べし。○和稻ノ精、米。はも、飯に  
炊たるを云。○荒稻ノ稻穂を採り束ねるを云。ひ。また  
の穀。是を類略しての玄米をも用ゆ。○掛税、え稻を束ね  
ながら社頭乃玉垣よ懸け。又ハ大前よ竹を横よ渡し是  
よ懸けて奉と云。倭姫命世記に。物忌始豆、稻手伊佐波登美  
神乎爲豆。拔穂。命。拔豆。皇大神御前爾懸久  
眞爾懸奉始豆云々。とあるハ。則是也。是より伊勢大神には稻を  
束て數多進る式あり。又田舎にては新稻を小竹の末につけて。  
初穂とて奉るよし。白酒ハ濁膠。俗云。又ハ醴。俗ハ一夜酒と云  
所もあるよし。白酒ハ濁膠。俗云。又ハ醴。俗ハ一夜酒と云  
○黒酒ハ清酒と云。又、白酒には清酒を用ゐる。黒酒には清酒に  
久佐木の灰を沃て用ゐる古式も。ある由



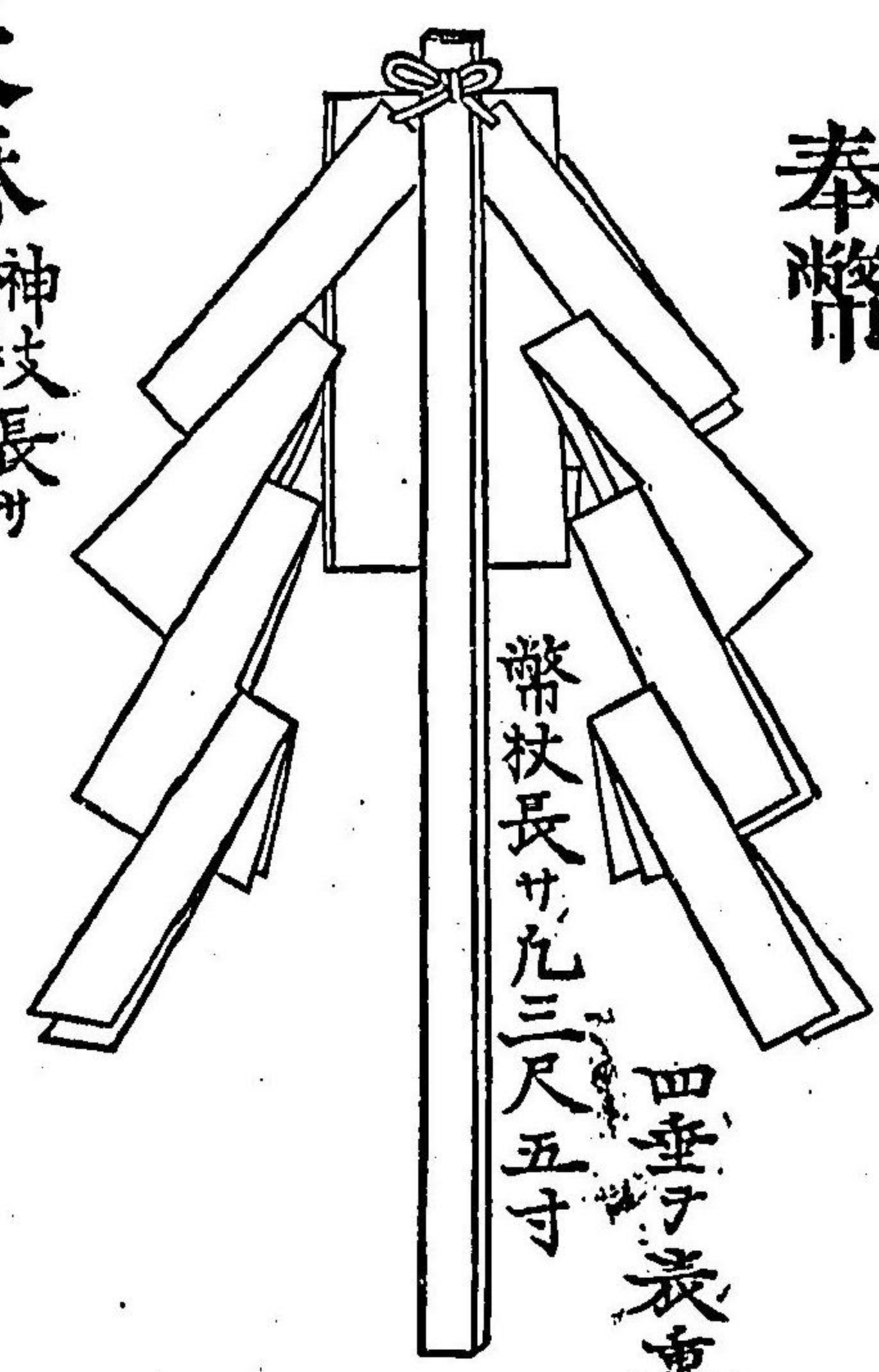


けまば也。○白和幣古語拾遺。令天日鷲神以津昨見  
 神穀木種殖以作白和幣是木也と見ふる如く。穀木の皮  
 を裂て麻布の如く織たるをも。未だ織ざるをも云り。是  
 を白和幣と云は其色白ければなり。是を布よせし事は  
 いと古のことにて。稍降りてきた紙よのこ漉て布よ  
 することと絶て見ぬ。和名抄よも穀紙の見ぬれども。  
 布のことに見ぬ。故よ今是よ換ふるよ紙。或は常の木  
 綿を用ゆる事とよかきり。○和妙荒妙の穀木の皮。はる  
 は拷木の皮を裂て織し物よて。其織の細きを和妙。織の  
 麤きを荒妙と云ひしと。今の京とかりてより絹を和妙。

麻を荒妙と云ひしと。○明妙照妙は。總て神よ奉  
 れる絹布の美麗を指て云べし。此絹布の短の幣杖よ挾  
 み奉り。長の帖ても巻ても奉りし也。中古より此事絶  
 へておかりたかども。維新以來再興し給ひて。官國幣社  
 よ奉まり。又後世幣と云て奉書紙。杉原紙等を切て。左  
 右よ垂を附て神前へ奉るは。是等代形状を模擬して奉  
 るよりおこきり世に八垂四垂と。かたわきて各傳あるよし  
なごは。嗚呼の限りなり。四垂におれ。八垂に  
まれ。意に任とべし。五色の絹を始刀派のいらぬ幣もあ  
り。又垂なき幣も。もとよりあればなりと。神事略に云り  
 の垂の。四垂八垂何をも答あらぬと。凡幣の四垂代方

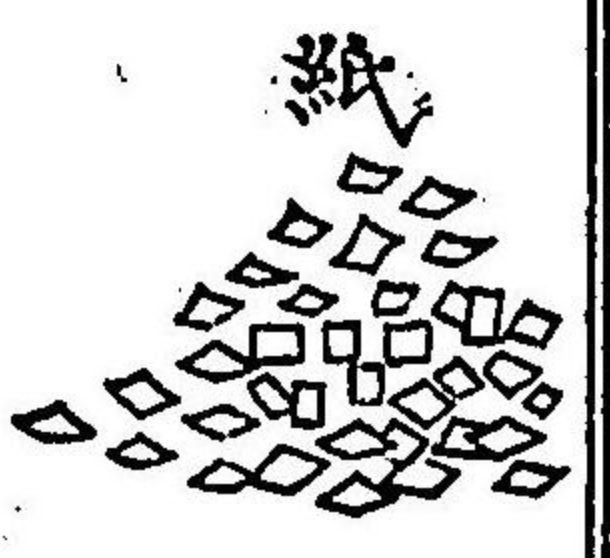
とだやかまもあまじきよや。又奉幣の幣の左右の四垂を表裏に挟み附べし。そは祭式摘要の圖に見えたり。○木綿の事ハ。上の白和幣の條云ふ如く。上古は穀木の皮ぬきども。後世是を紙に換て今神祭に用ゆる神籠玉串。大麻。小麻。注連など附る八垂に截断たる者是を木綿垂と云ひ。又紙を小細に截断たる者是を切木綿と云ふ。また切麻と云麻苧を小細に截断たる者なり。是等の者の神社祭式の條に見ゆあり

奉幣



幣杖長サ九三二尺五寸  
四垂ヲ表裏ニ挟ム

切木綿



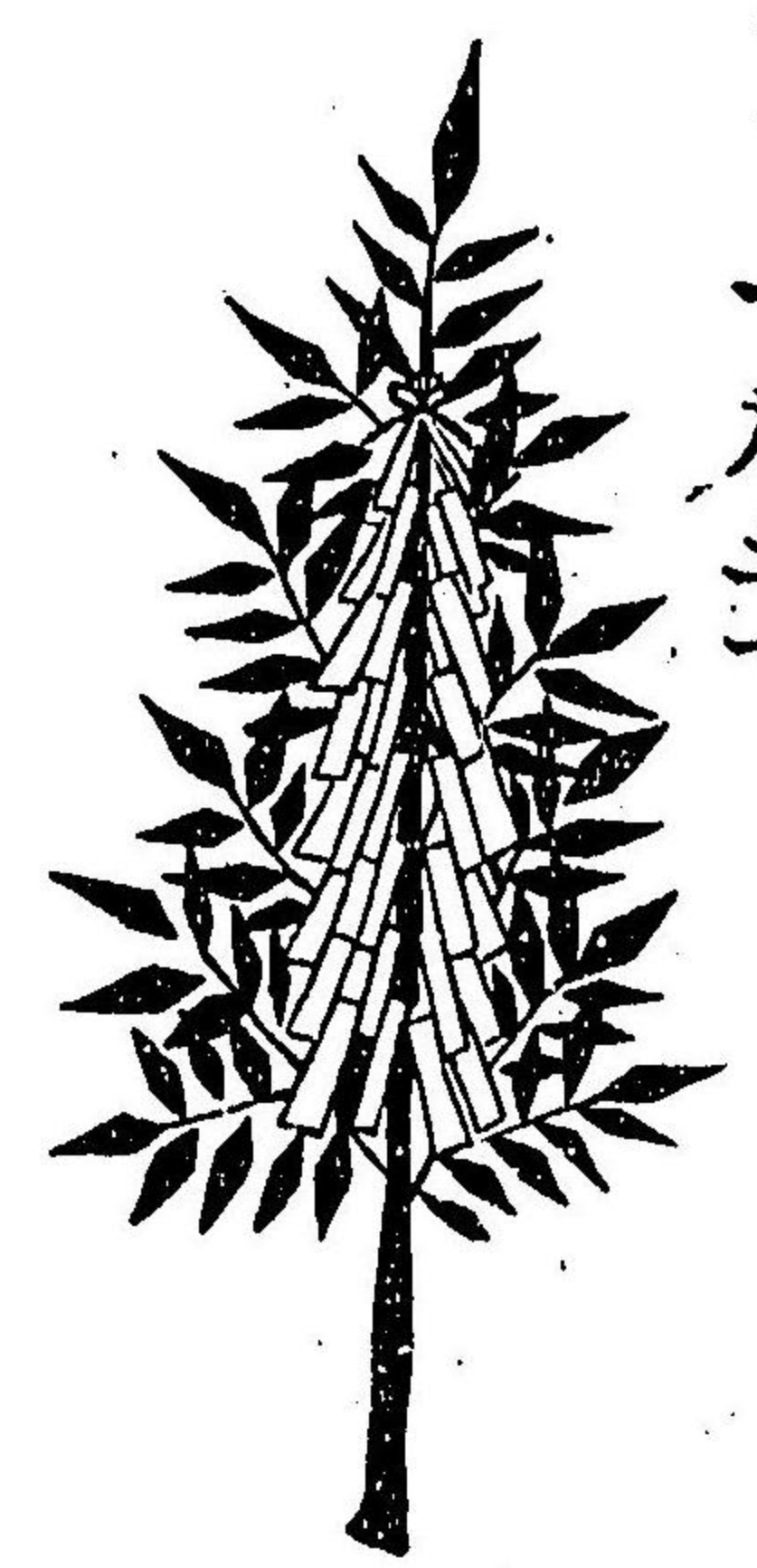
切麻



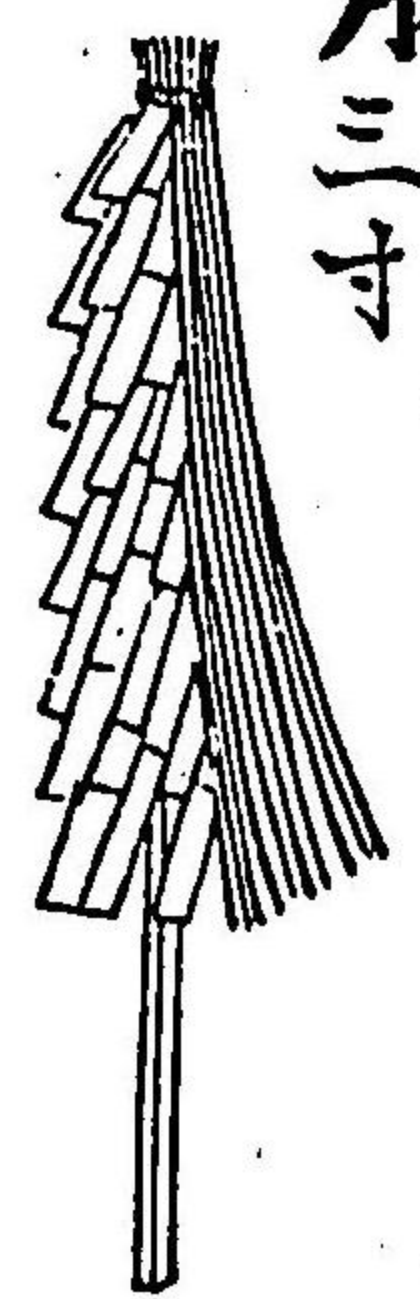
大麻  
九四尺  
神杖長サ



玉串  
一尺五寸  
神杖長サ九

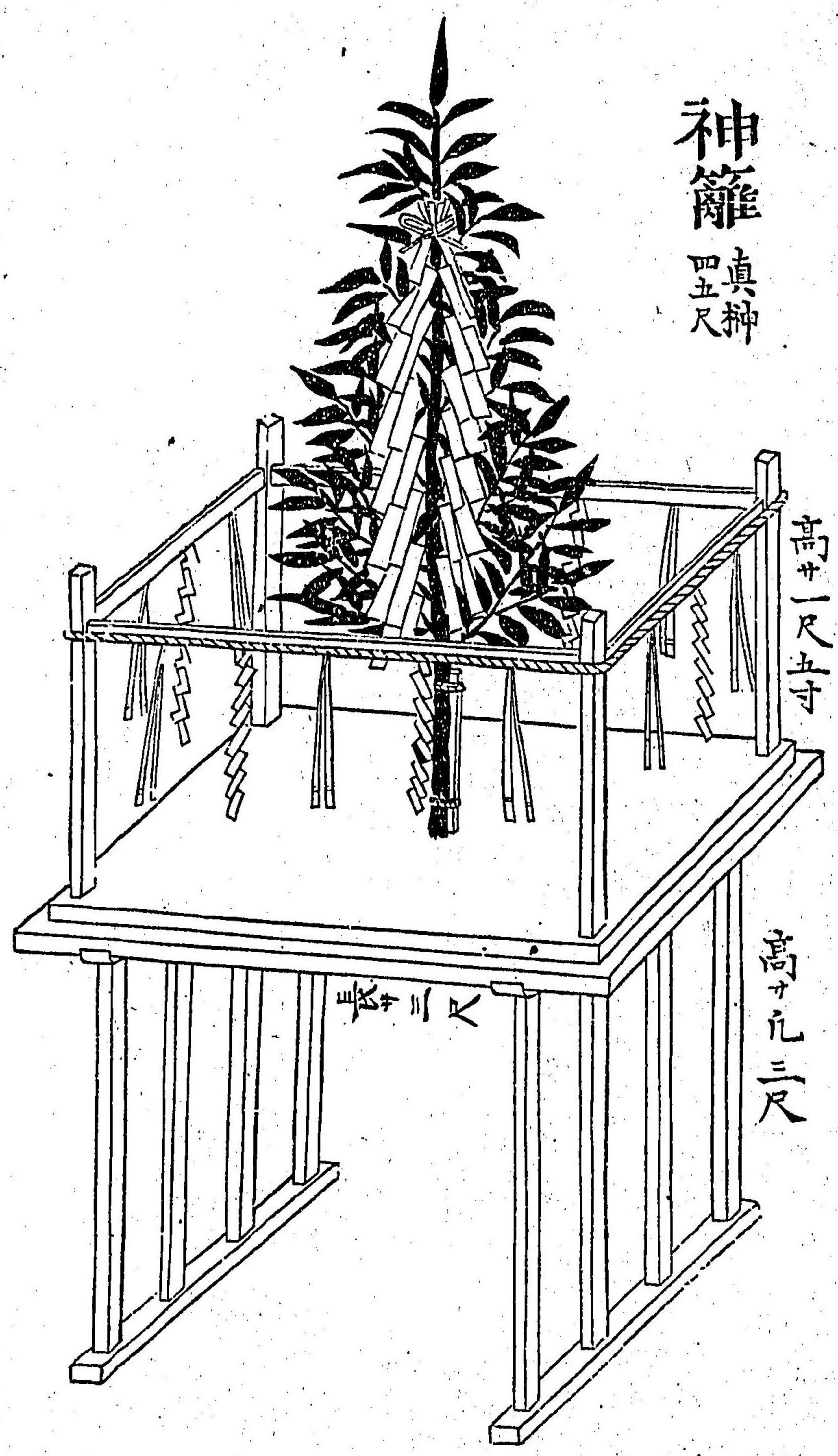


小麻  
九一尺  
三寸



### 神籬之條

凡、神籬カミと云は神座也。いづれの神カミも多タせ。新ニ奉招ホウカウる時  
 是を造る。是ハ神カミニ木綿キワタを垂ツリれ。高案タカノ乃上ノ建ツて。御形  
 代タテとなす。こノ図ヅの如ノし。因云神社祭式の圖には。麻苧も懸た  
にやあらむ。神樂歌に神樂に木綿とて。誰代にか神の御室  
又。麻苧初けんどある如く。神籬には木綿こそ附れ。麻苧は知ら  
す。殊に大麻にまき神送カミノはて。清火スガヒ以て燒却ヤクふべし。然れ  
 らわしければなり。神送カミノはて。清火スガヒ以て燒却ヤクふべし。然れ  
 ど。私の神事カミノ。神籬造りまつらむ。いとく畏オソし。神  
 天地ツチノを充塞ミてまします。真心マコトココロを以て祭りなむ  
 神籬カミをしとるも。忽タ降來カミノ給ふ事なるべし



### 奏樂之條

凡、祭典の奏樂の開閉扉の時。齋主座揖して座を起らしよ  
 り。殿より昇り御扉を開き或ちて御扉の側 或は殿外降りよ。  
 着迄の間是を奏す。○神饌奉撤の時。陪膳座揖して座  
 を起らしよ。奉撤畢て末席の手長より陪膳復座して  
 座揖するはての間是を奏すべし。○神官神部奏樂を心  
 得ざるは畧するも妨るし。但し郷村社よりハ之を除く。○  
 遷座式の時。開閉扉の固より。出御入御の時。ハ亂聲を  
 奏す。路次には立樂を奏すべし。

### 献馬之條

凡、神祭に献る馬は。本儀は。生馬生馬はありつととも力及ば  
 ざれば。木馬。繪馬繪馬は略してハ紙紙を畫き。或ハ藁藁以て造  
 りても献るべし。其祭典よりてハ白馬を献るもあ  
 り。又黒馬を献つるもあり。そハ其式より従ふべし。此時藁  
 を以て造りある白馬は白紙黒馬は墨塗紙墨塗紙を以て是を  
 纏纏ひ貼貼こと圖の如き。是ハ祈雨。祈晴。蝗除。疫神祭等等に献  
 る料なり。然れども遷座式の時。乗馬若し乗馬乗馬かくば  
 荷馬荷馬よても生馬をば。沐浴せあめ鞍を着け被被ひ清めて  
 献るべし

藁馬 原質



白馬



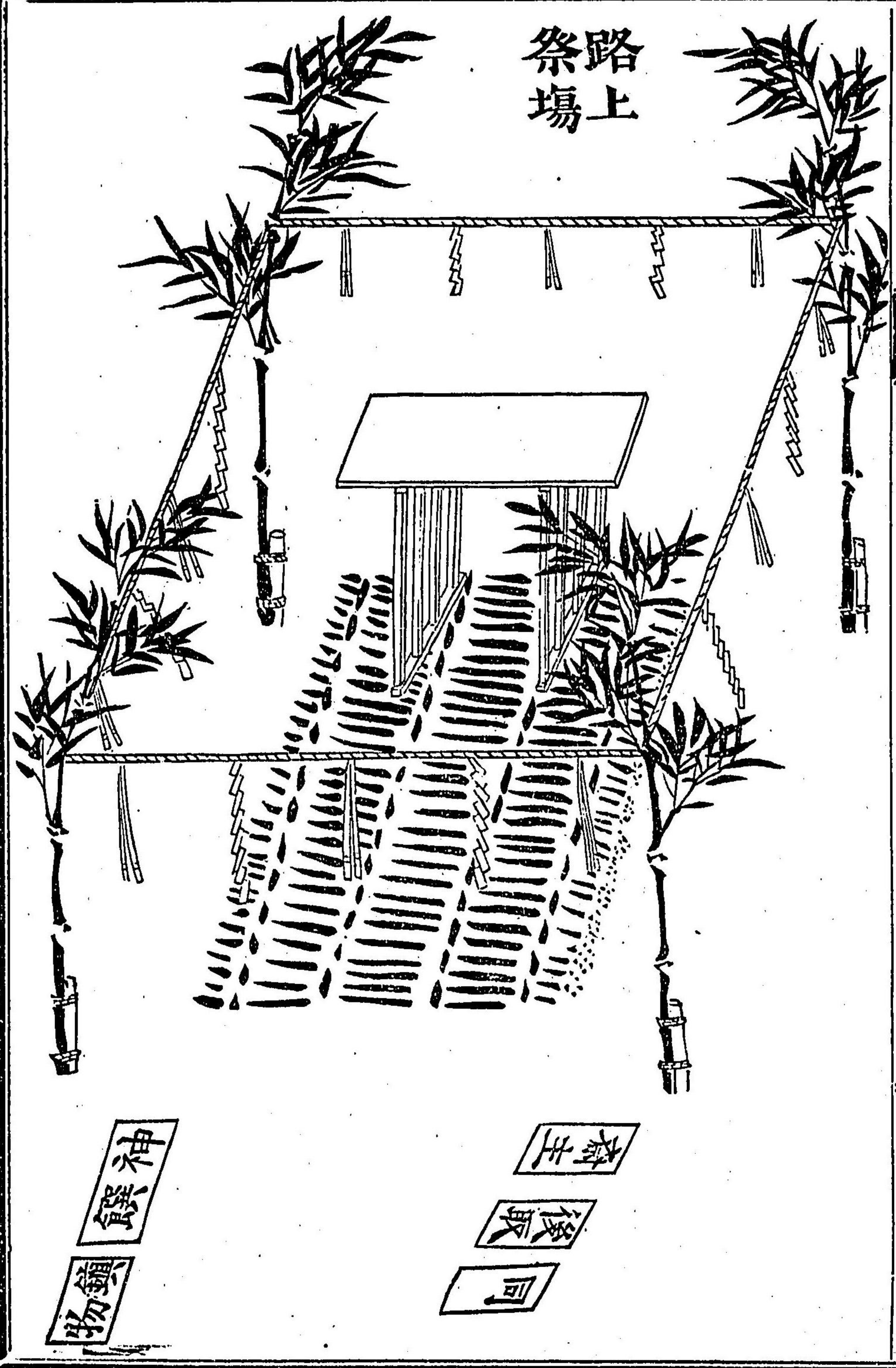
黒馬



路上祭場之條

凡、路上カミの祭場ハ其祭べき場所の四隅に杭クサを打ウち。是コトハ笹  
 附の竹タケを結建ムスビ。其上部ウヘハ注連ヌシを引廻ヒキマし。中央ナカハ新薦ニヤを四  
 八枚ヤチ何れニも場敷ウチき。高案タカを神籬造ツクらハ二脚ニカド神籬カミ設ツけ便宜ニの  
 所トコロハ廣狹ヒロサに從したがふ敷キき。高案タカを神籬造ツクらハ二脚ニカド神籬カミ設ツけ便宜ニの  
 所トコロ。神饌カミを辨備シるコトと圖エの如ごとし。○道饗ミチ。鎮火チシ。疫神祭ヤミ  
 等らと是コトを氏子ウヂ四塚シツツ。俗に云乃路傍ノチ。山神祭ヤマと其材シ  
 木キ。神社の心乃御柱を切キ採ツべき山ヤマ。地鎮祭チハ其普請場シ  
 小。蝗除祭カハ其蝗カを掃ハべき田畑チの側ワタに設ツく。何れニも送ツ  
 神畢カミらハ直ナちに撤除ハすべし

路上祭場



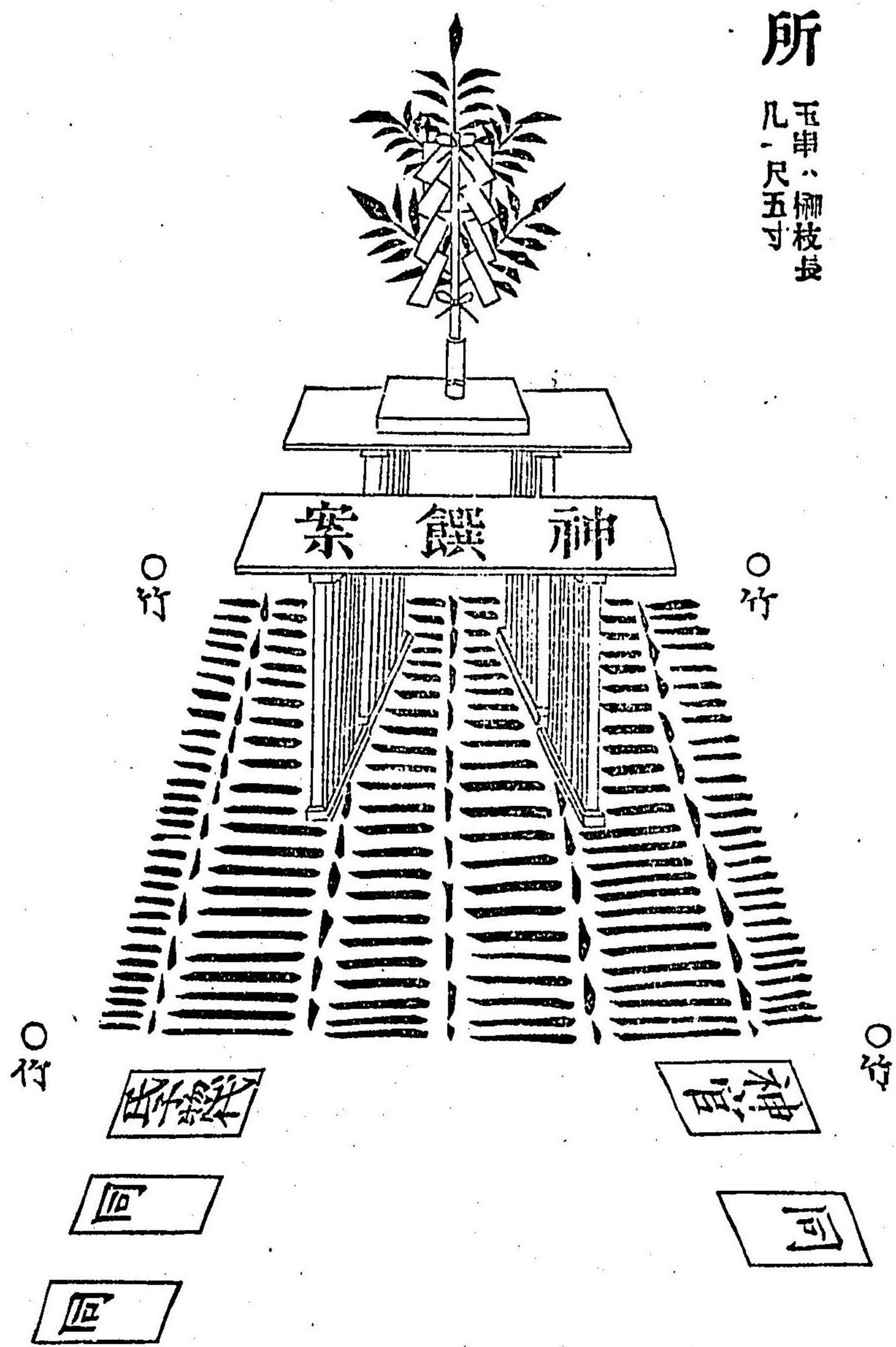
遙拜所之條

凡、遙拜所ハ其本社遠隔成を以て、是を設くる者也。○神武天皇。孝明天皇。紀元節。神嘗祭。春秋季。神嘗祭。皇靈祭等の遙拜となす時は、遙拜所あらば勿論。若し遙拜所なき所へ産須那神社の境内に於て其方に向ひ、路上祭場の圖式に倣ひ、四隅に竹を建、注連を引廻し、中央に新薦を敷き、高案を設、玉串を安置し、神饌案を置き、祭場前の左側は神官の席、右側は氏子惣代等の席を設け、以て是を遙拜所となし、事畢らば直ちに撤除し、玉串は清火を以て焼却ふべし。又是等の遙拜となす時、兼勤社へ頒布す

玉串も是より同一

遙拜所

玉串、柳枝長  
凡一尺五寸

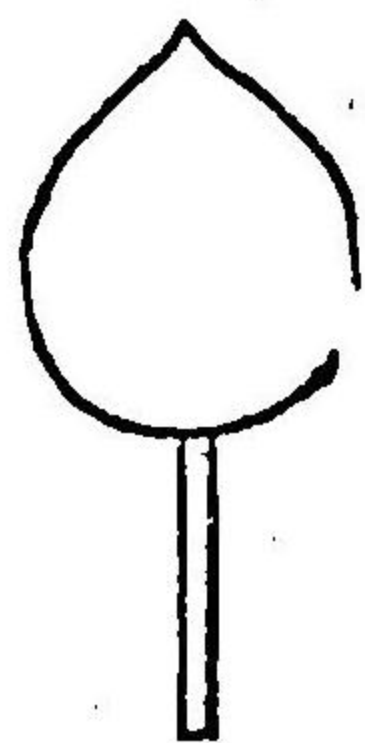


疫神祠之條

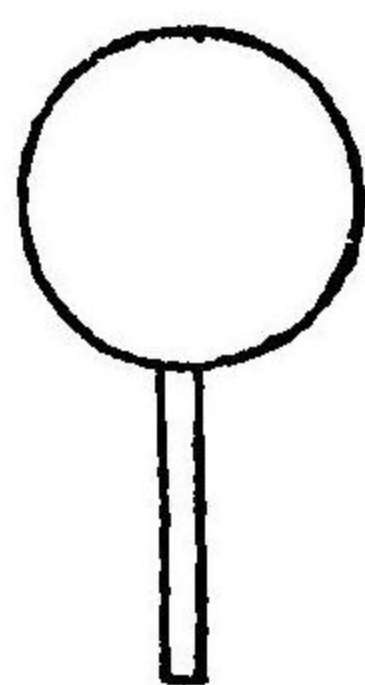
凡疫神祭ハ疫神祠ト云物を造りて。是を昇き村内を廻ら  
しむべし。其形狀ハ茅を周圍五尺位より束ぬ。繩以て上より  
下へて十二所結ひ。頭より柳を挿建。次より白と赤との小  
幣十二本。次より金紙よて切たる玉十二。次より銀紙よて切  
る鏡十二。次より藁馬十二を附るなり

幣物

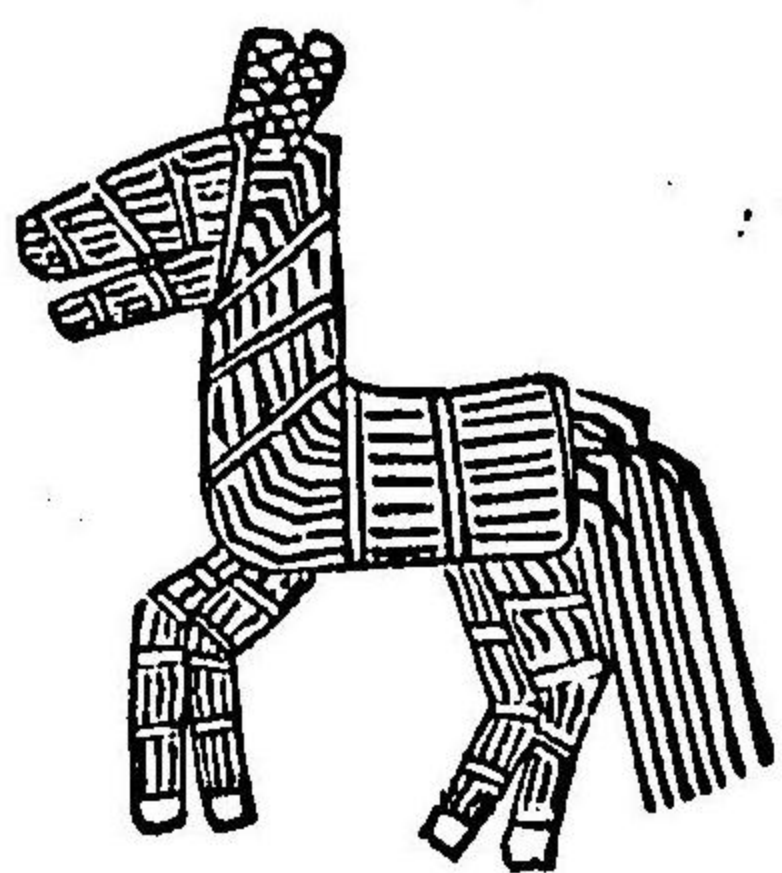
玉



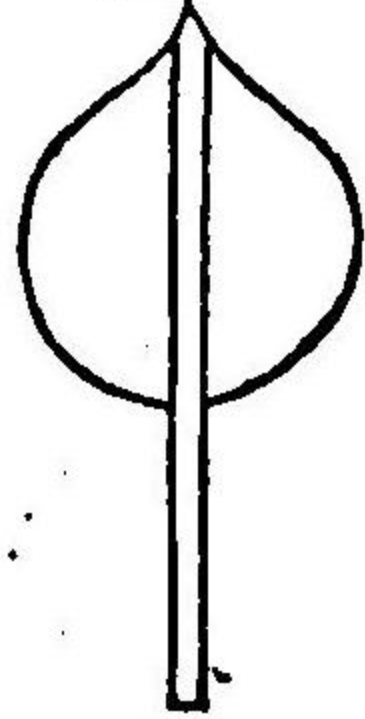
鏡



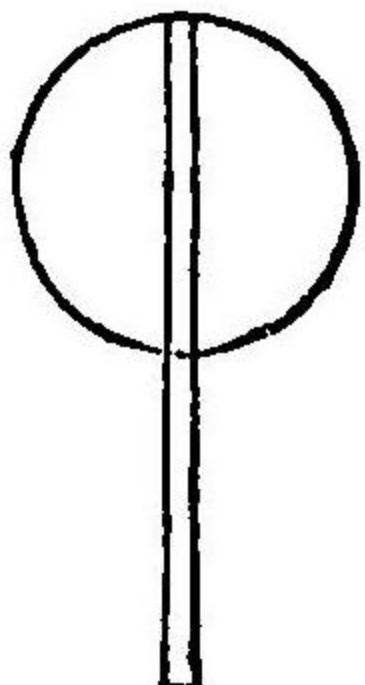
藁馬



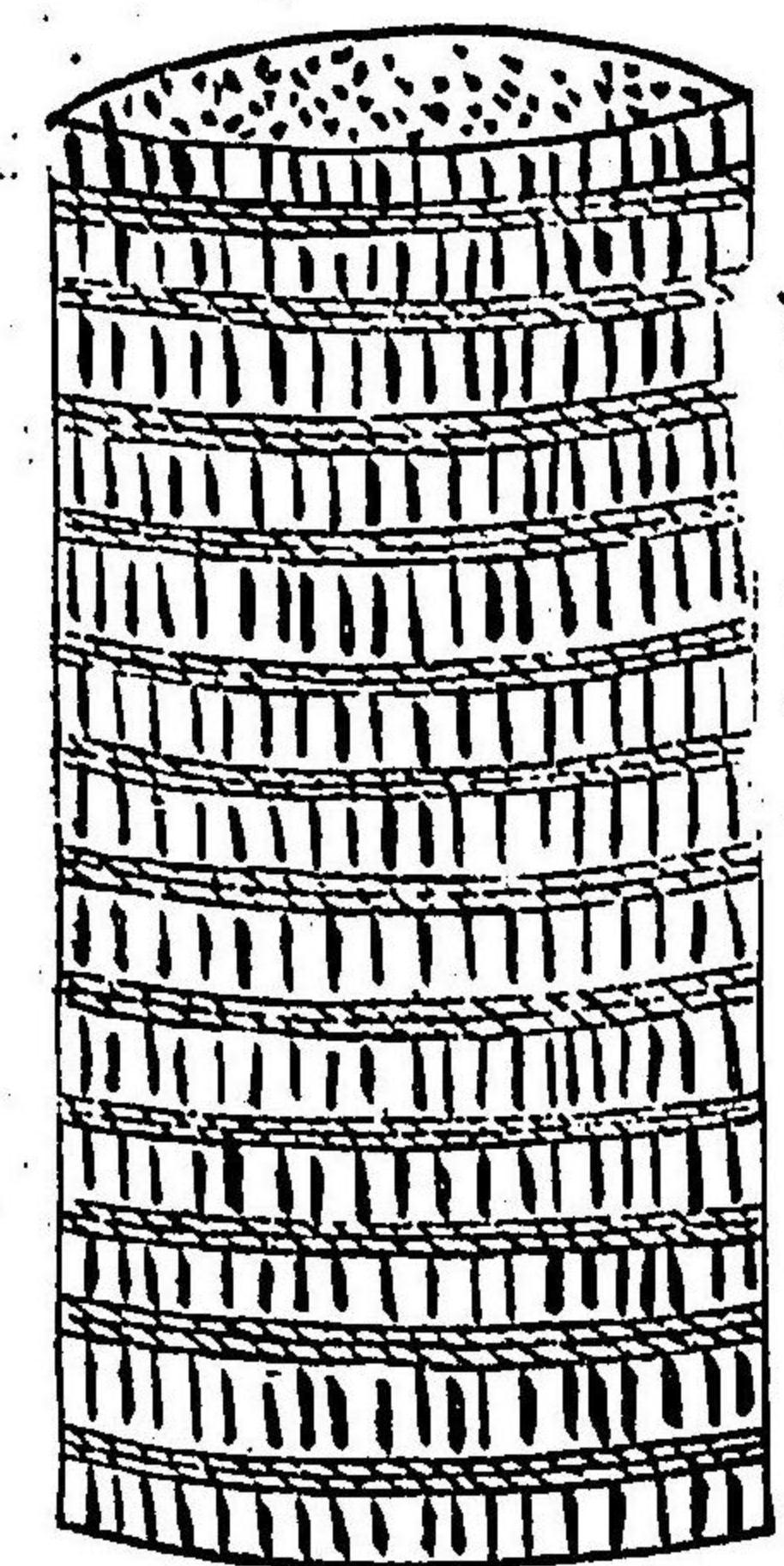
裏同



裏同



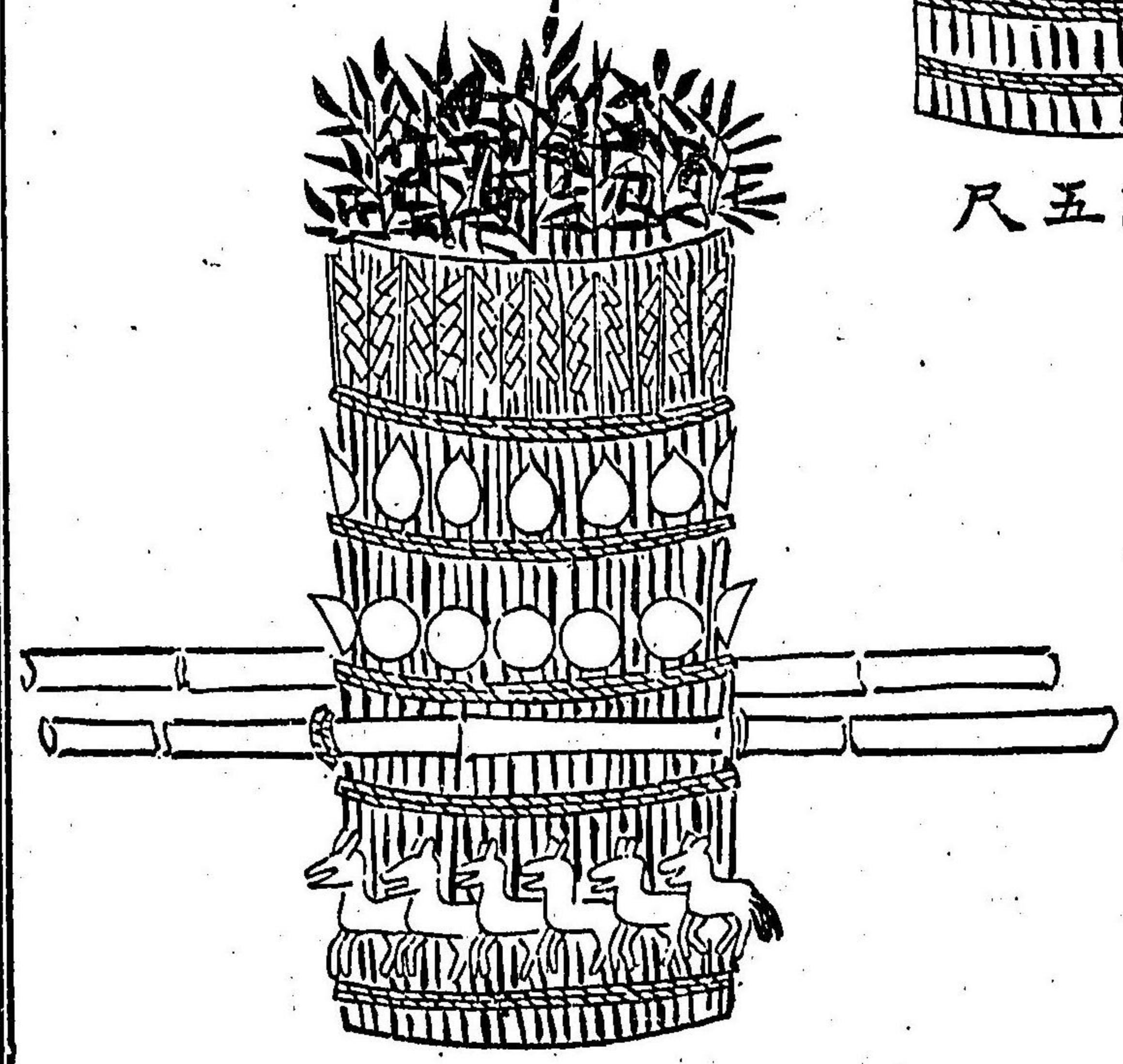
第一束ねたる圖



高さ凡三尺

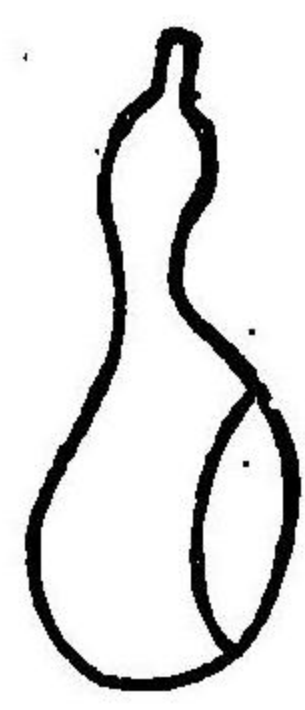
尺五九圍周

疫神祠裝飾圖



菟川菜之條

凡、鎮火祭に用ゆる菟<sup>ウ</sup>の玉細<sup>タマコ</sup>と吉葛<sup>キクワ</sup>の實<sup>ミ</sup>にて瓢<sup>ヒョウ</sup>罩<sup>カサ</sup>ふくべ  
 の類。其外瓜蔓<sup>ウリヅク</sup>物の祖<sup>ソ</sup>とも云べしと云りしが。俗<sup>ソコ</sup>に云瓢<sup>ヒョウ</sup>  
 罩<sup>カサ</sup>なり。是<sup>コト</sup>に輕<sup>カ</sup>くして水<sup>ミヅ</sup>に沈<sup>シヅ</sup>む事<sup>コト</sup>をく。又水<sup>ミヅ</sup>に浸<sup>シヅ</sup>して腐<sup>クサ</sup>  
 ることなく。水<sup>ミヅ</sup>を汲<sup>ヒ</sup>ふ最上<sup>モトメ</sup>の物<sup>モノ</sup>なる故<sup>ユヘ</sup>に。是<sup>コト</sup>に水<sup>ミヅ</sup>を汲<sup>ヒ</sup>て  
 火<sup>ヒ</sup>の災<sup>ガイ</sup>を防<sup>ヒ</sup>ぐとあめ<sup>メ</sup>に備<sup>ヒ</sup>ふるなり。此<sup>コト</sup>は尻<sup>シラ</sup>の方<sup>カタ</sup>を少し切<sup>キ</sup>  
 て。水<sup>ミヅ</sup>を汲<sup>ヒ</sup>べくよ<sup>ヨ</sup>かき<sup>カ</sup>べし



○川菜<sup>ウツク</sup>の玉細<sup>タマコ</sup>と水<sup>ミヅ</sup>  
 苔<sup>コケ</sup>とも書<sup>カ</sup>て。水田<sup>ミヅウラ</sup>また小溝<sup>コヅ</sup>などよ生<sup>ナ</sup>るヒルモと云物<sup>モノ</sup>な  
 て。漢名<sup>カンメイ</sup>に天董<sup>テンドウ</sup>艸<sup>ソウ</sup>と云ふ。是<sup>コト</sup>に又川菜<sup>ウツク</sup>の類<sup>ルイ</sup>の祖<sup>ソ</sup>とも云べし



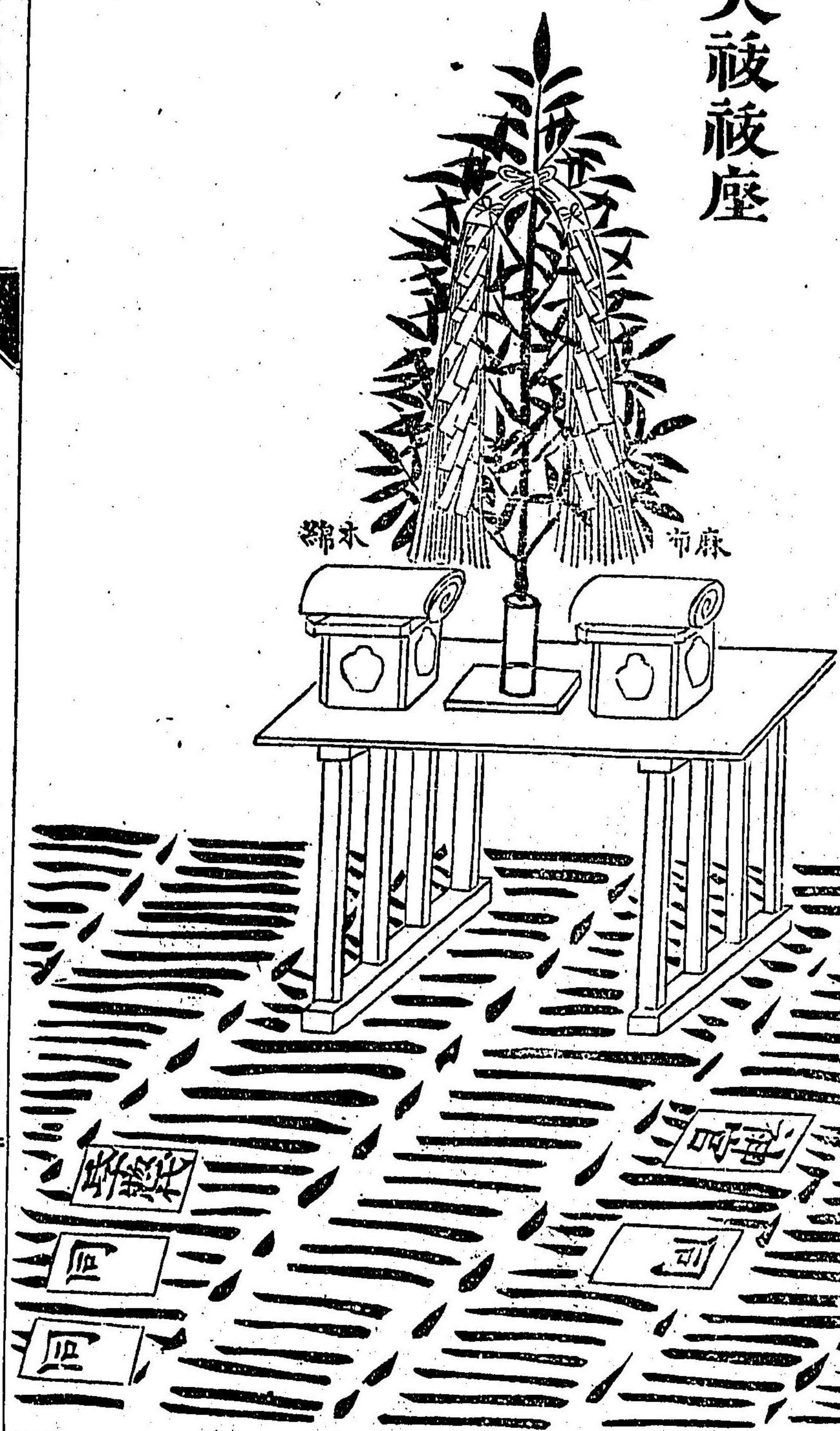
とありしが。俗に川口ルモと云物よて則ノボリ艸なり。  
是はよく水を含む物なる故に。是は水を含むしめて火  
の災を防ぐ爲に備ふるなり

### 大祓祓座之條

凡、大祓の祓座ハ祓舎あれば勿論。若し祓舎なき神社ハ路  
上祭場の圖式に倣ひ。庭上ハ齋竹を建て。注連を引廻し。  
薦を鋪き。高案を設け。大麻。祓物を置き。以て是を祓座と  
す。然もとも雨儀又社地狭き社を拜殿を用ゆ其式圖の  
如し。○祓物の木綿一両代るに常の木綿布五尺麻布を以て代用す

### 大祓祓座

是を三方に載す。高案の上に置くこと圖の如し



### 鎮物之條

凡、鎮物は地鎮祭よは。米鹽切、麻木綿の條可見を用ひ。新殿祭宅神祭よは。米酒切、木綿木綿の條可見を用ひ。何れも三方よ載せ。後取、よ持せ齋主よ從ひしむべし。○鎮祭の時よは。先鎮物を散布し。次よ木綿附乃糊を執て被ふこと。皆左右左よすべし。

鎮物之圖



### 遷座用具之條

大麻

振一

大式見合セテ造ルニアシリ

鹽湯

杯一

大土器ニ湯小枝ナリ鹽クテ

弓

張二

白木通常ノ造弓ナ本備エナルモ可ナリ

矢

手二

竹矢ヲ造ルガ本備ナリ但シモ略シハ通常

手袋

枚四

御桶代よ手と觸る、神官の用具なり

或麻ハ布

覆面

長官以下神部の員數よ從ふ麻紙布或ハ造晒ル木

玉串

覆面の數よ從ふ玉串見合セテ造ルニアリ

木綿繩二

御樋代ハ觸る、神官の用具なり晒木綿或ハ  
造シ

薦

正兩殿路次の間ニ鋪又被戸ヨも入用なるべし  
兩殿路次の薦の上ニ鋪く其數ハ兩殿の遠近  
に従ひ考へ定むハ

御羽車具一

御樋代を載せ奉る轆なり 御樋代ハ頂ク本クヲルハ  
時ハ御羽車ニ及ハマス又略シ  
テ神輿ヲ用ユル及ハマス又略シ  
梅ノ摺ハニ造ルベシ

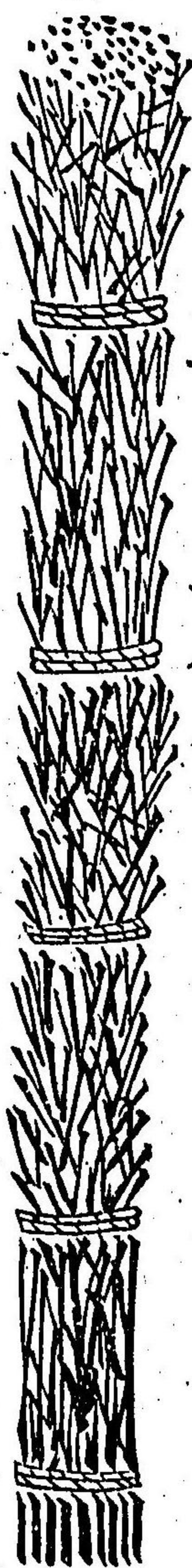
白杖木二

長サ凡四尺

松明木四

薪又ハ竹或ハ麻柄ニヲ造ルベシ

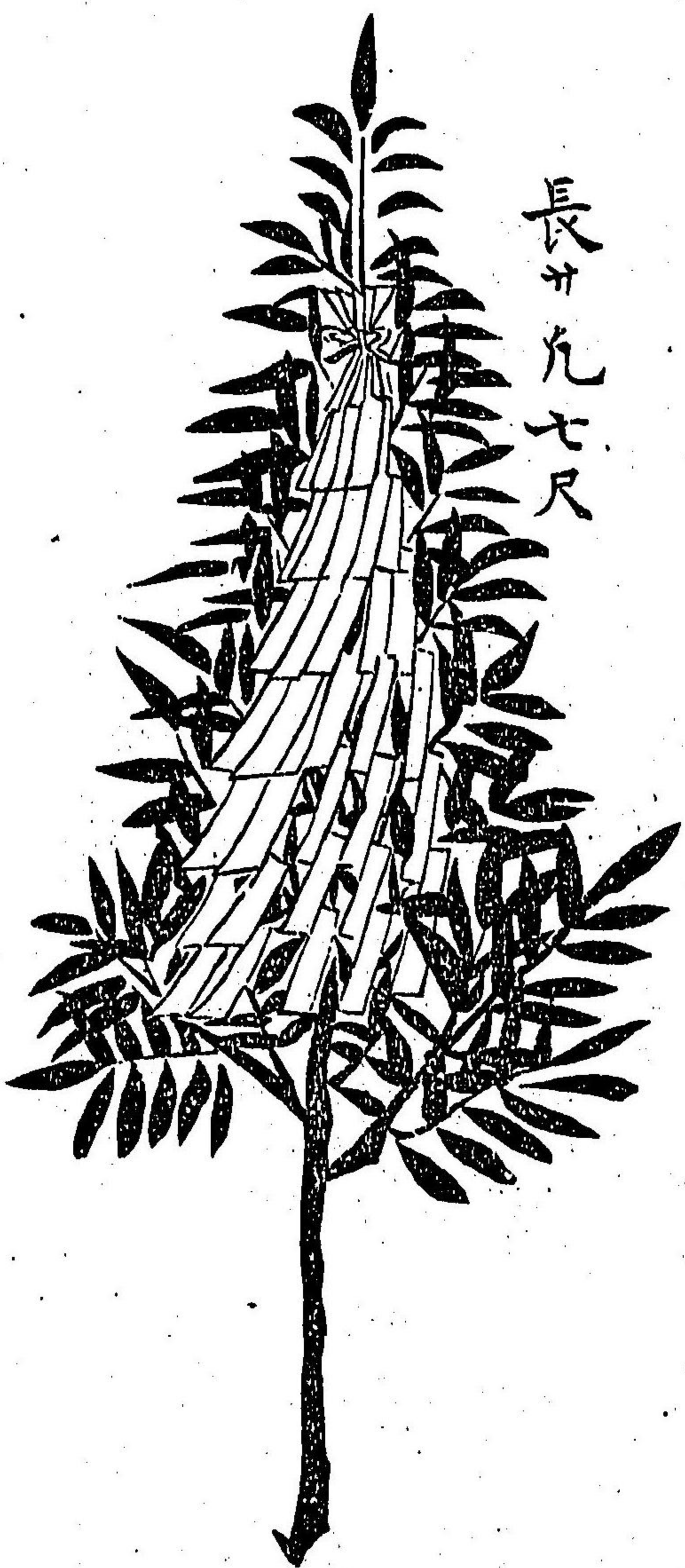
長サ凡五六尺



大櫛木四

本儀ハ五色ノ八垂ヲ附シトモ略シ

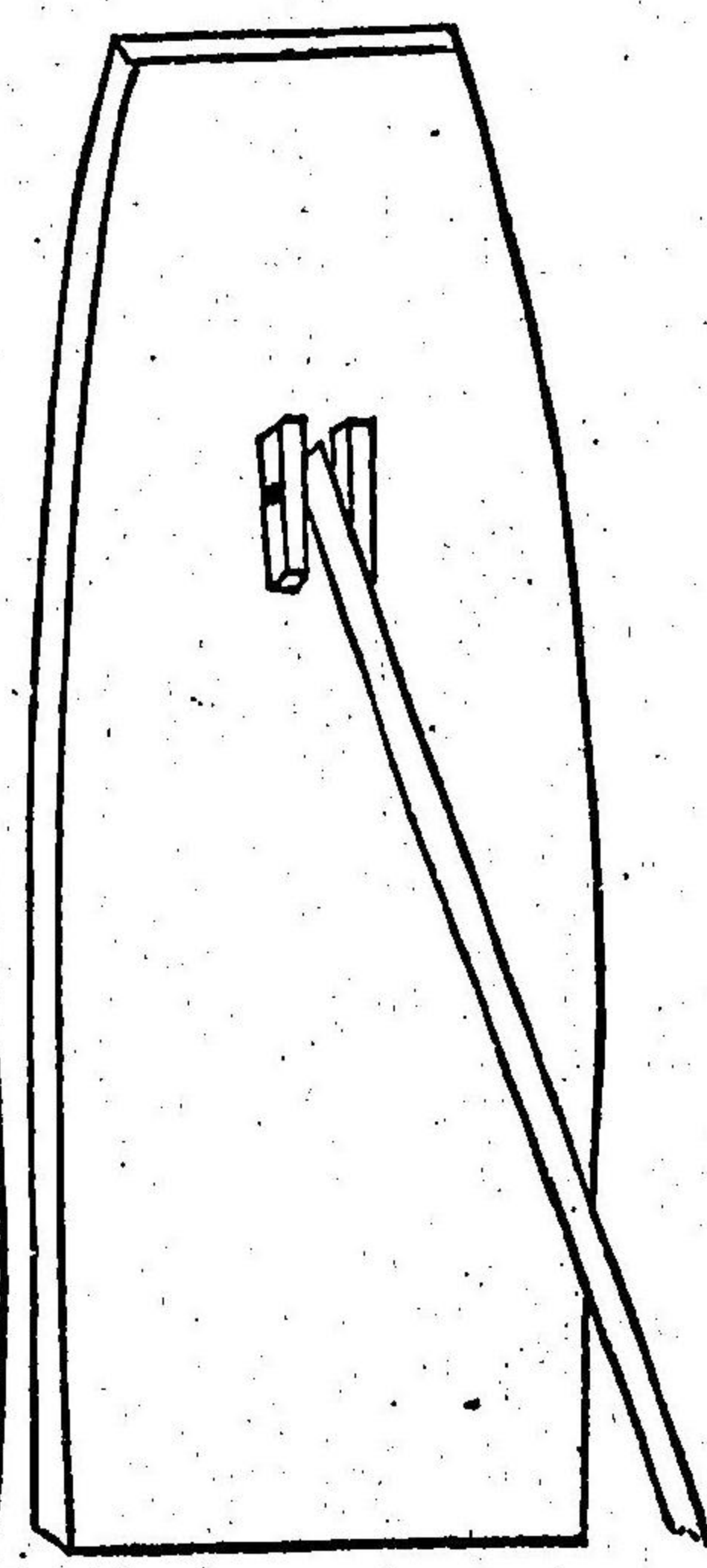
長サ凡七尺



### 楯

本儀ハ杉ニテモ造ルベシナハ  
松又ハ杉ニテモ造ルベシナハ

### 裏



長サ四尺

上廣サ一尺三寸

中廣サ一尺五寸六分

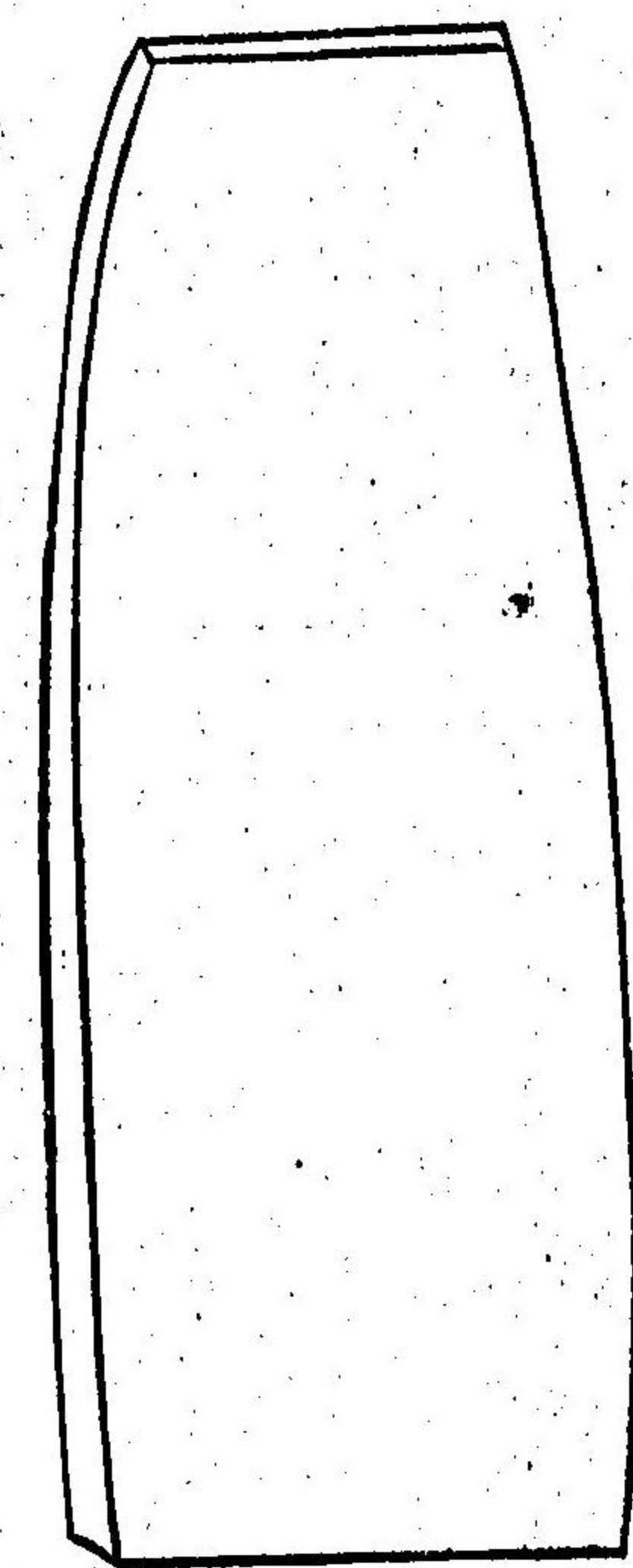
下廣サ一尺四寸八分

厚サ六分

右寸法ハ略シテ

本儀ノ三ヶ一也

### 表



### 鉾

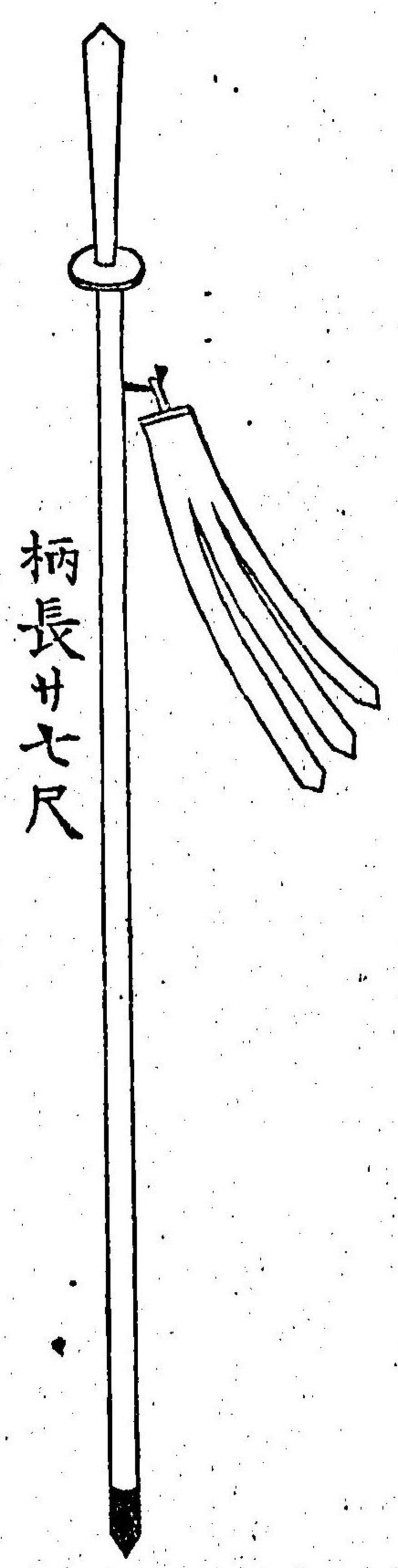
本ニ

比禮鉾なり。體ハ大和紙ヲ貼。鈔モ略シテハ絹貼ナル。用

ニ。長サ二尺。廣サ三寸。上七寸位ヨリ  
下ハ。三ツニ割リ先ヲ尖ラヌヘシ

### 絹蓋

柄一



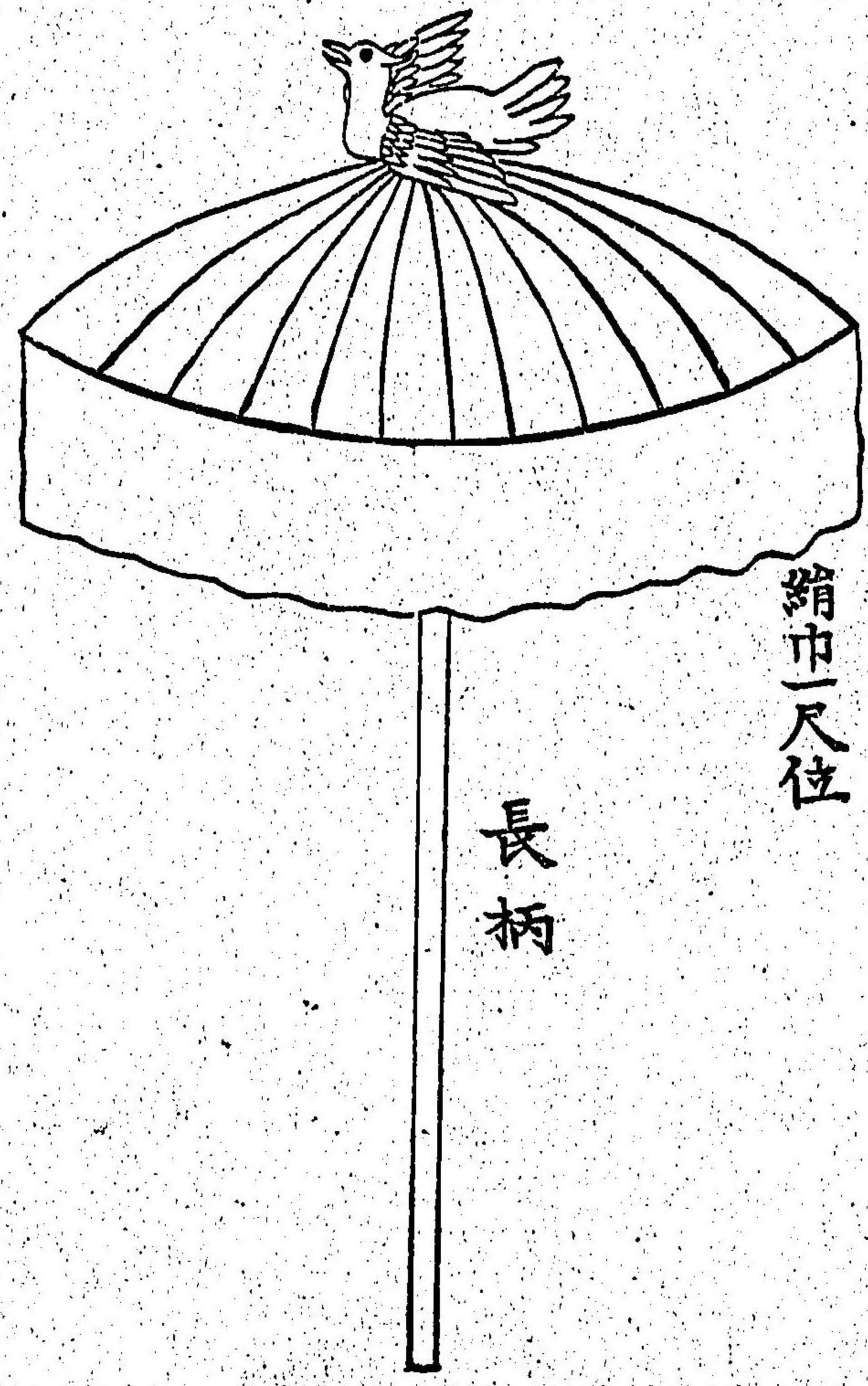
柄長サ七尺

祭典略解ニ絹笠ハ角形ニシテ。其製造ハ別ニ長  
キ柄アリ。柄ノ末曲リテ少シ下ル。其曲ル所  
風ノ如ク貫通シテ紐ヲサケ。其紐ノ末ヲ蓋ノ頂  
ノ環ニ貫通シテ結下ケ。又蓋ノ裏ノ正中ニ丸  
ニ小サシク出タル處アリ。是ハ綱ヲ貫通シ其末  
左右ニ分チ。持テ天子ノ御上ニ差擧奉ル由見  
タリ。又或書ニ其圖ヲ見ル。シテモ。其儀イト難  
ク。略シテ長柄ヲ用ニベシ

絹垣 張一

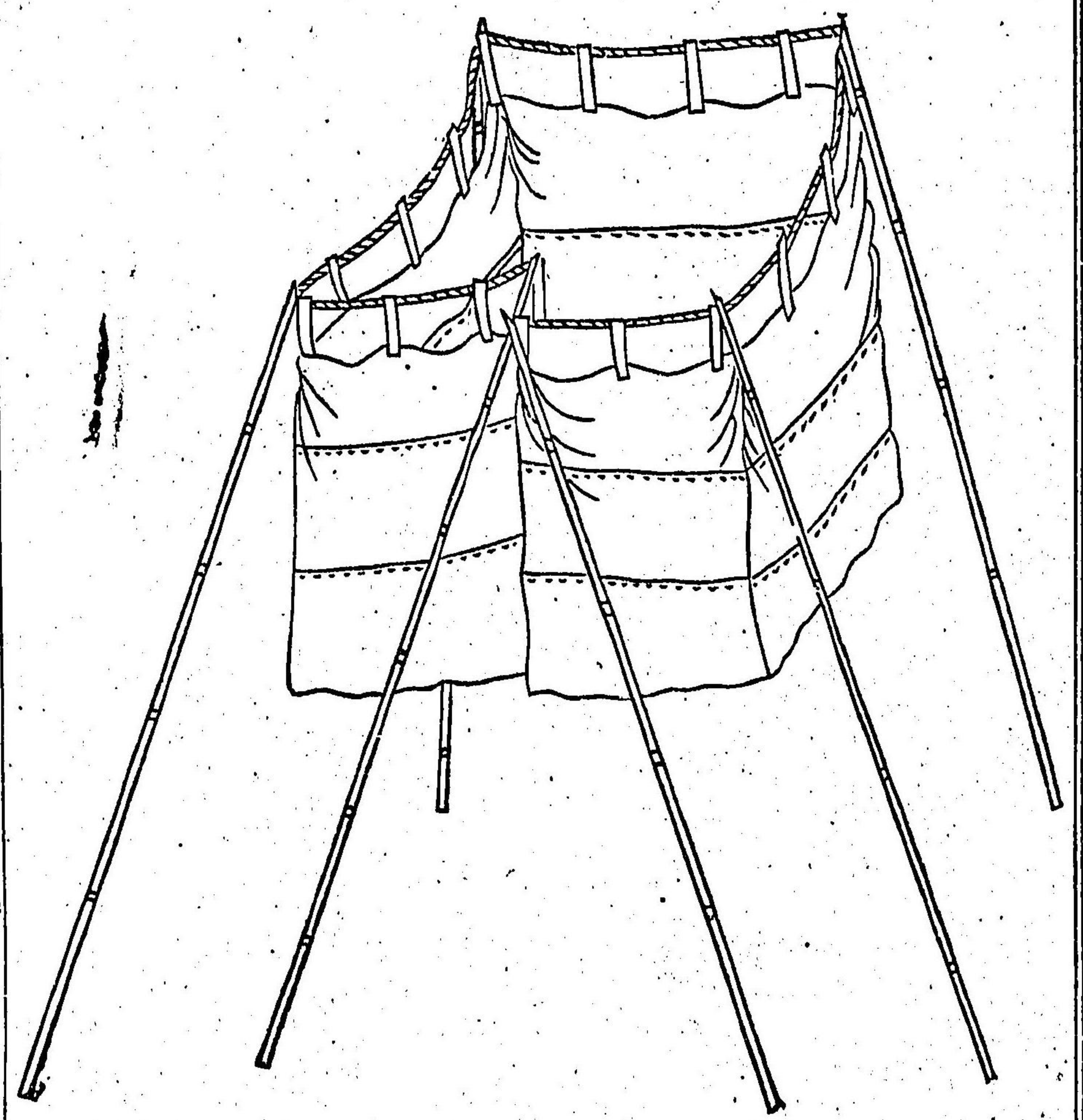
御羽車の左右より行合て捧け圍む用具也

本儀ハ絹ナレドモ略シテハ晒木綿又ハ麻布ヲ用  
ニ。長サハ御羽車ノ大小ニ從ヒ。廣サ三幅ニシテ  
ノ如ク縫ヒ。乳ヲ多ク付ケ是ヲ矢筈ノ如ク削  
竹ニ括ミ。六人ニテ御羽車ヲ捧ケ圍テ持ナリ



絹中一尺位

長柄



### 神床裝飾之條

凡、宅神祭、階職、祖神祭等は、床の間を祓清て神座とす。上  
 注連を引下し、薦を鋪正面に机を設け、其祭神を神札  
 勸請して是を祭り。其前は神饌机を置くべし。○祖靈  
 祭も又是は同じ。但し祖先の靈或ハ靈舎より迎へ祭  
 るべし

### 竈神祭之條

神附祭井

凡、竈神祭は、竈の及ひ其邊を祓清め、其竈を神座とし、神  
 札を認て祭り。其前は薦を鋪き机を設け、以て是を神饌  
 の置座とすべし。○井神祭も又此式に倣ひて祭るべし

### 作法之部

#### 笏之條

凡、笏を常は右の手で持てよ。正笏マサカサと云は、両手を持ち、脛  
 のあたりを當て正しくせよ。○揖する時、拜する時、祓戸  
 に向ふ時、神前に向ふ時、皆正笏せよ。○起タテマながら拍手  
 する時、神饌奉撤する時、神の枝を持って打祓ウチハラする時、大麻  
 を持て打祓する時、盥湯を打とぐ時、奉幣座、奉幣、祝詞、  
 座、祝詞、玉串案、玉串を出す時は、皆右の腰に横ヨコせよ。  
服着用の時はは○座ながら拍手ヒする時、祓詞、祝詞、降神昇神、  
笏を懐に入よ

詞を奏する時。奉幣玉串を献する時。皆座右に置きよ  
○扇もはた是れ同じくせよ

### 沓揖之條

凡、沓、揖と云へば。沓を着て階下に至りし時。兩手は笏を持  
ち臍のあまりへ當一揖して沓を脱よ○沓を着るときは  
はつ沓を着て。右の如く一揖せよ

### 起居之條

凡、居よはまつ左の足を引て跪き。次は右の足を引て居れ  
よ。起時右の足より起よ○列座の時起居ともよ。上

座の方なる足を後よせよ

### 揖之條

凡、揖と云へば起かから。首をさげ正笏して腰を折よ。座  
揖と云へば座ながら。右の如く前より伏し折よ○揖と拜  
との大なる違あり。思まかふべからむ

### 拜之條

凡、拜と云へば正しく起も。正笏を向ふへ差出し。座して頭首  
せよ○一拜と云へば一度拜せよ。是を拜一段とも又再拜  
は二度拜せよ。是を兩段拜と云なり  
再拜兩段も。まつ再拜して座

揖し又再拜す。合せて四度拜せよ。座揖は拜の四拜のた、  
一連ふ四度拜せよ。是を四段拜と云。再拜兩段とは異也。八拜の。まつ四段拜  
して座揖し。又四段拜す合せて。八度拜するなり

### 拍手之條

凡、拍手と云へば左右の指先を揃て二拍よ。大嘗會便蒙に  
是を常の拍手  
へと云。○拍手一段の八拍が本儀なきとも通常と四拍よ。  
拍手兩段の一段四拍も又一段拍合せて八拍よ。八  
開手の大嘗祭儀式も拍手四度。度別八遍神語所謂八とあ  
開手是也  
りて三十二拍なり。さきども此の別式にて。通常の八開

手のほつ八拍短手一。又八拍短手一、合せて十六拍よ。短  
手  
は拍手の數に入らず。又一に八開手は一連に  
八拍と云ふ説あれども。此は略儀なるべし。○短手と云の  
音を立てずして二拍よ。是を短手  
一段と云又一拍も短手と云○  
忍手と云ハハ掌の本を合せ。指先はかり拍て音あらしめ  
る。此は葬祭の時も拍手もて。短手との異なり

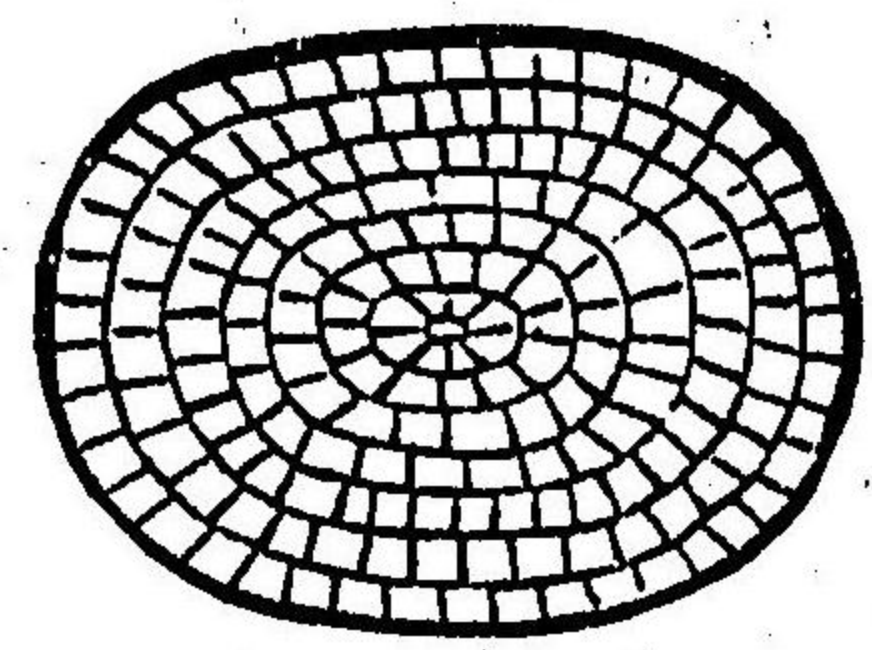
### 祭場進退之條

凡、祭場に進ふのほつ長官主齋より入り。列立し揃て座し。一  
同座揖せよ。座を起時座揖して起よ。○神前へ進時  
の座揖して吾圓座或ハの下乃方より進出よ。神前より

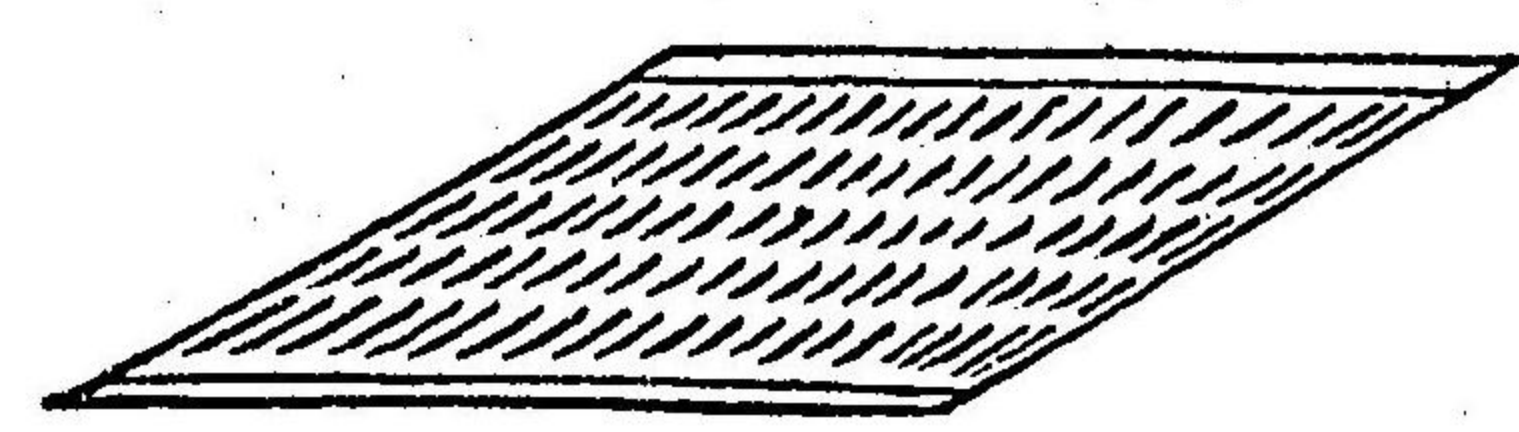


復座ヒる時も。又吾圓座或ハの下方より復座して座  
揖せよ。○祭式全く終りて祭場より出する時ハ一同座  
なら一拜し長官主より座揖して起退き出よ

圓座 一尺五寸



軾 ヒヤツキ 一尺五寸四方



縁ハ白ノ麻 或ハ水綿ニ テスベシ

### 膝行膝退之條

凡、膝行と云へば神前の座よ着く時。其座よりは少し後へ

控へ正しく立向ひ。一揖してまつ左の足を引て跪ひき。次は  
右の足を引き。笏を右の手に持て。右の膝より凡三つ歩  
進み。座よ着て座揖せよ。○膝退と云ハ神前乃座を退く  
時。座揖して嚙とあけ。笏を右の手に持て。左の膝より凡  
三つ後へ引退き右の足より起ち。一揖して復座せよ。○  
階より上よ昇らは總て膝行膝退せよ

### 龜居之條

凡、龜居と云へえ圖の如く居ながら。足をつまたて、嚙を  
下よ附へからま○柳の枝を持て打破する時。大麻を持

て打被する時。搥湯を打と

そぐ時。神饌奉撤する時。奉

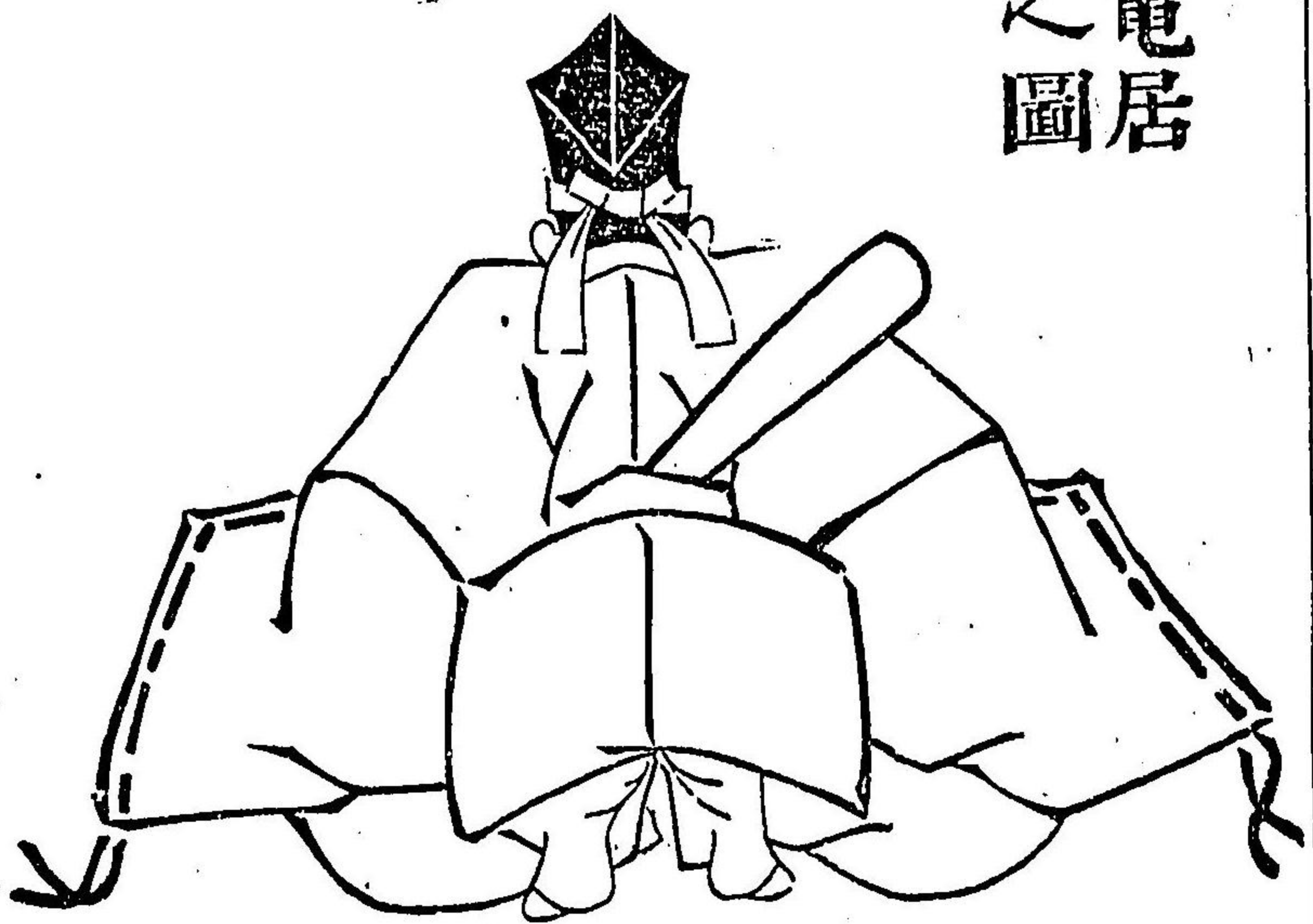
幣座。祝詞座を鋪時。奉幣。祝

詞。玉串をもち出して。長官

主 齋 誂たの次官 副 齋 主 且 渡す

時。皆此さ誂る居をよ

之 龜居 圖



祓除式

大通常の祭典に用ゆる式は別式をわりゆ

凡、祭典を行ふ當日よの齋主以下。總て祭祀は預るへき人

員の皆被殿は着て。此式を受べし 被殿の式を行ふ殿舎を云。若し被殿なくば

庭上に楯。或の幕を張懸らしして。假に其處を被殿と定むへし。然れども雨儀。或の社地狭き社にては略して。拜殿を假用るもよ

べかる被殿の裝飾は。薦を置き正面に被案 高サ八寸廣サ八寸長サ一尺二寸

を設け。其上よ木綿附の柳 長サ凡二尺五寸 を置き。其前よ被の

座 凡三尺四方。縁は白の麻又の木綿を附べし。此の奉幣座。祝詞座に用ゆるも。また同じし。 左側 吾が 右側 が 齋

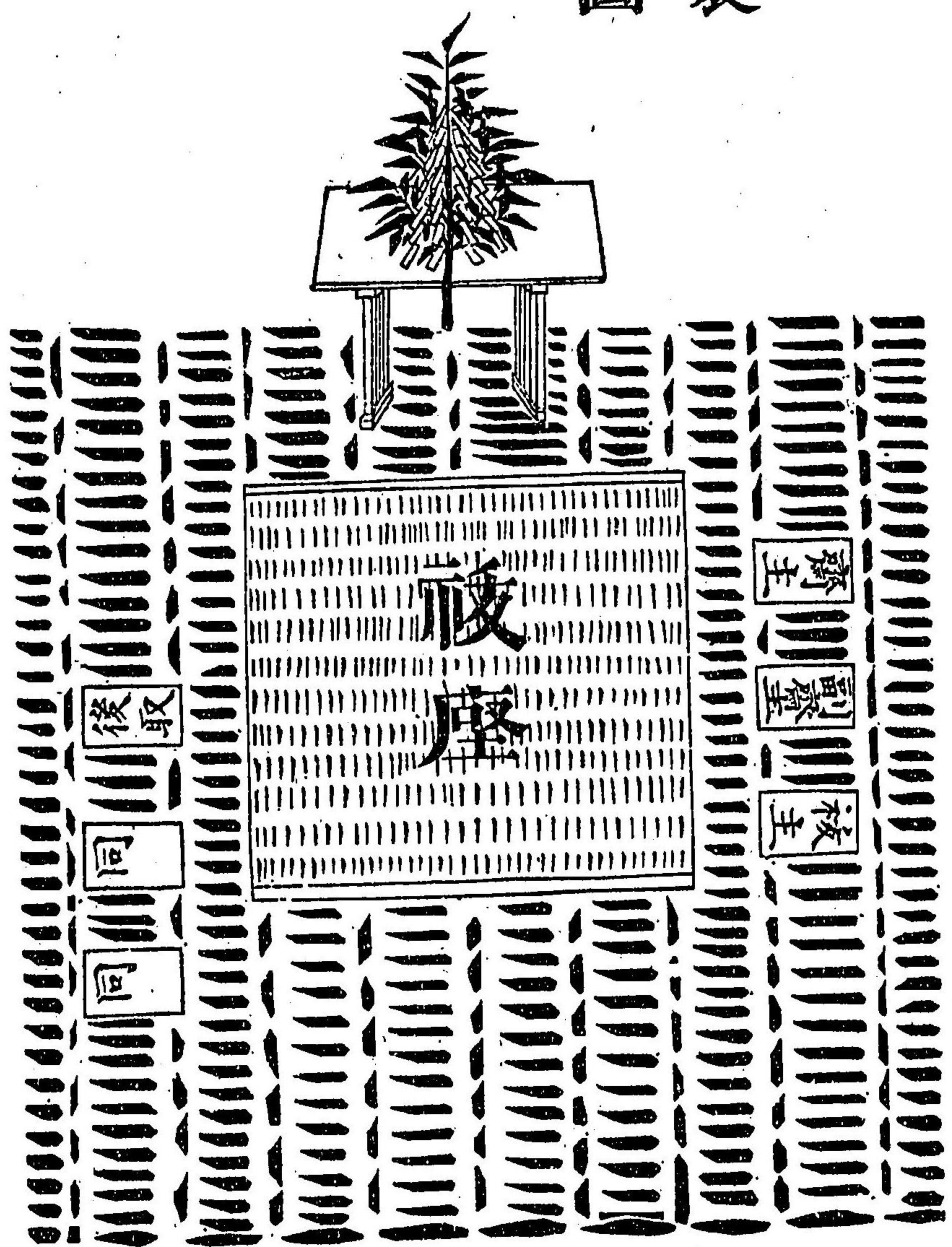
主。副齋主。被主。右側よ後取等の祓を。圖の如く豫め備お

き。事畢らに取除べし

先齋主以下各被殿は着く。被殿には齋主より入り消て着

床 或すし一同に座掛す

# 祓殿装飾之圖



次祓主一揖祓主をなくば副座揖して左足起ち祓座の前より足座し膝行進み少し後へ控へて一揖す 次着座一揖 祓詞を懐中より取出し笏に持添へ兩手ニ捧けて二拜を 次祓詞を讀む 凡つして祓座乃中央に着て座揖す 次再拜 祓詞を懐中より取出し笏に持添へ兩手ニ捧けて二拜を 次祓詞を讀む 唯各稱笏を右の傍にかき祓詞を左乃傍にて開き正而へ捧け字文の左を吾身やうにけす他て音聲明亮に讀むべし 次再拜 讀了りて左の傍にて卷き笏を持添て二拜を 次拍手 祓詞を元の如く懐中に入を笏を右の傍にかきて手を二拍つ 次一拜 笏を持て一拜す 因云其祭典によりて。齋主或は祓主降神送神の詞を讀む時にも此祓詞を讀むは作法に同じ。然





杖よひたして左の方へそ、ぎ。又ひあして右の方へそ、ぎ。又ひたして左の方へそ、ぎ。神饌會の儀と大麻と同く時の宜きに従ひて行へよ

次は齋主。次は副齋主。次は後取一同は右の如くしてそ、ぎ。畢りて盥湯器を使部は渡し撤却せしめしより以下は。皆大麻行事の儀の如くせよ。○其飾方の祓戸上祓戸への

高案を建て。其上へ左の方吾方がは大麻を立て。右の方吾方がは盥湯を大土器は盛り柳葉の小枝を附す。三方は載せて置くべし。

### 殿階昇降之條

凡、階を昇に、其本社左よりなまは右の足を先まし。右よ

りなまは左の足を先まして。一段昇る毎は兩足を踏揃へて。靜に昇れよ。○階を降に、其本社左よりなれば。右足を先ま右よりなまは左足を先まして。一段降る毎は兩足を踏揃へて降まよ。○昇降とも少し斜まを好よとす。

### 開閉扉之條

凡、御扉みびを開かむよ。先、座揖まゝして下足起ち階を昇り。正面は進み一揖して左足座し。座揖して次は再拜拍手。程け

膝行かあて進まし。錠あらば此時錠を懷中より出御戸の左我方

へ膝行かあて左は御戸を靜ま開き。次は御戸の右我方へ

膝行あて右の御戸を静ま開き。畢て覆面正面より向ひ一拜座揖して。御扉の左側吾右膝退して座揖せよ。○御扉を閉るよも。先座揖膝行して正面へ進み。座揖一拜して覆面御戸の右吾左へ膝行して。右の御戸を静ま閉ぢ。次此時御戸の左吾右へ膝行あて左の御戸を静ま閉ぢ。此時閉畢て。覆面正面より向ひ再拜拍手。座揖膝退あて右足起ち一揖あて階を降り。本座より復あ下足座退して座揖せよ。○閉閉の時の各平伏せよ。

### 平伏之條

凡、平伏と云へば座をから正笏あて股をはぢからせよ。臂と腹と頷を下よ着よ。然れともあほり頭を垂るよべからず。

### 稱唯之條

附書

凡、稱唯と云へば。平伏あてウーサーと申せよ。其音聲は細く高くして。音末を去聲と云て稍下りめく聲なり。始の口を閉て音末よは口を開くべし。此の上へ白し上る聲に降神。昇神。祝詞。又の宣命等讀畢りた警蹕と異なり。思ひまがふべからず。○警蹕と云へば平伏せすしてサーと白せよ。其音聲は微音よして始より口を開きて唱ふべし。此の下を鎮め戒むために下にしめす聲に

て。神幸を催し神饌を奉り。又ハ天子出御の時なごに白す聲也。便蒙る警蹕ハ先を追ふと訓べると見ゆる。然るば神幸の時ハ。こゆきのとききとおふと云ひ。神饌奉る時ハ。こけれみさきをおふと云べし。

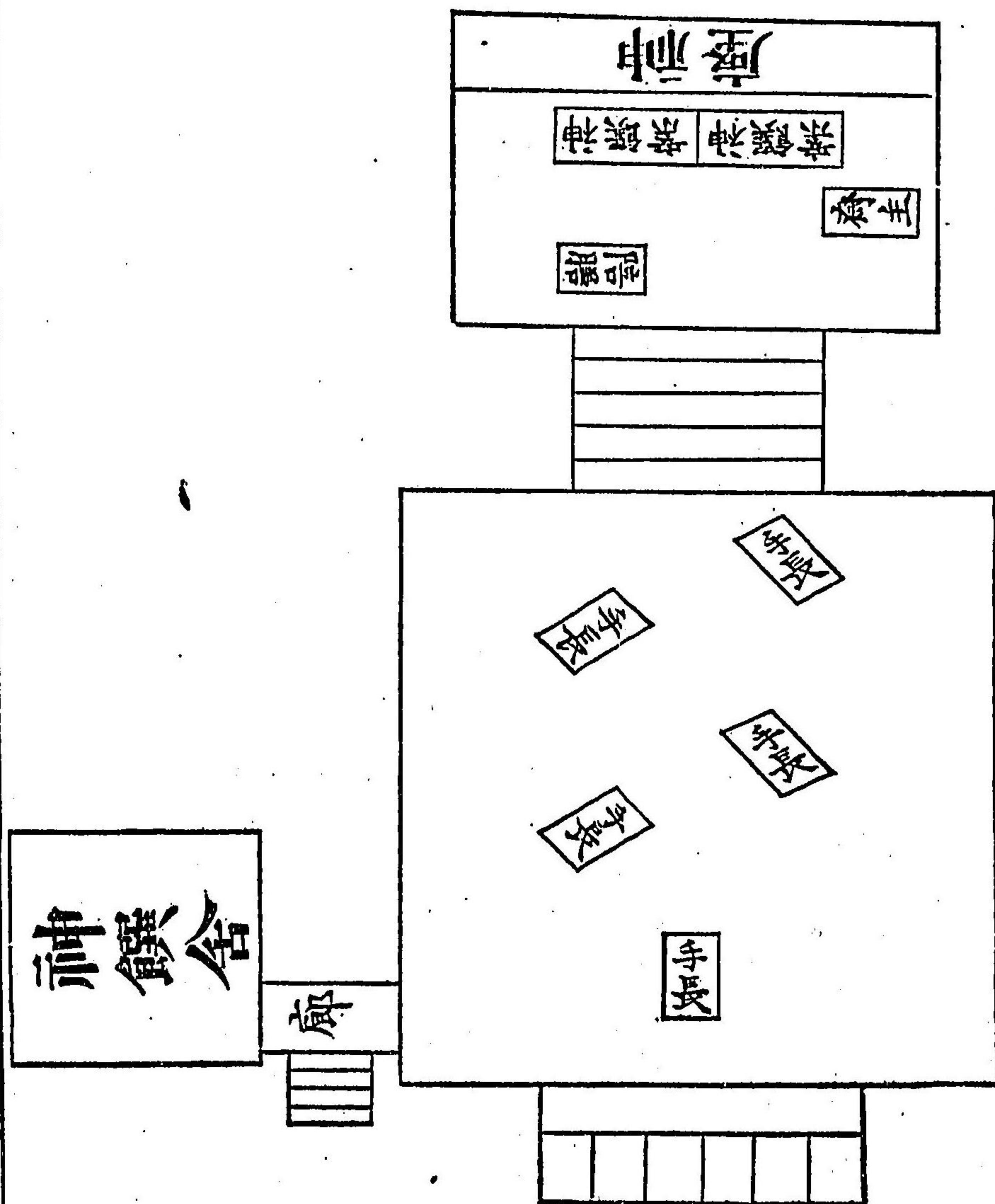
### 神饌奉撤之條

凡、傳供長を陪膳と云ひ。傳送人を手長と云ひ。神饌舎より神饌を送り出す人を神饌司と云ふ。是を總て神饌係とも云ふべし。又神饌を調度するハ神饌司の職かり。○神饌を奉る時は先典令警蹕。次ハ陪膳座揖して下、足起、我。圓座或ハの下方より進み出て階上より昇り。一揖あて左、足

座し膝行あて正面より進み。座揖一拜して御扉の右側左、吾方へ膝行し。齋主の前を少し下り着座座揖して。笏を右の腰齋服用の時ハ笏を懐下、足起、我。の下方より下し掌の方を上しして膝の上より附け。首を下けて居よ。次ハ次長座揖して下、足起、我。圓座或ハの下方より進み出。階下より至り一揖龜居して。笏を右の腰齋服用の時ハ笏を懐下、足起、我。の下方より下し掌の方を上しして膝の上より附け。首を下けて居よ。次ハ手長若けて両手を握り合せ。甲の方を下し掌の方をば上しして膝の上より附け。首を下けて居れよ。次ハ次第に進み。各次長より倣ひて斜に居ること圖の如し



神饌傳供之圖

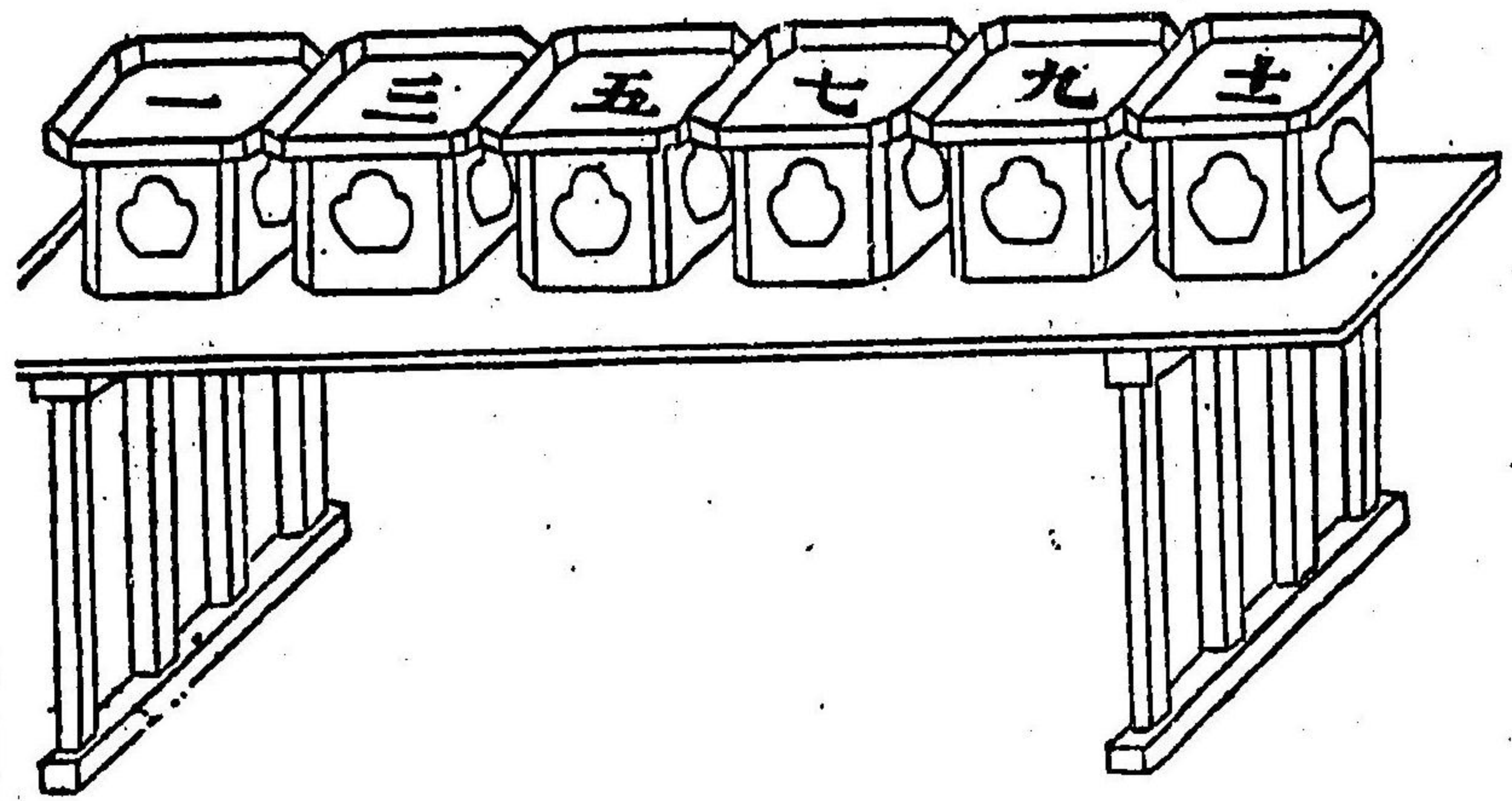


次ニ神饌司。神饌舎より神饌案を送出さば。互ニ膝行し受取渡して共ニ一揖せよ。神饌舎遠隔る或ハ人小なる時ハ起て傳送するも善しからず陪膳是を受取らば。膝行して正面に置き一拜せよ。此の時手を下につく以下神饌の傳供ハ皆是ニ同くせよ。○神饌傳供の順序ハ種々諸説あれども。まづ神社祭式に倣ひて定むる事左の如し

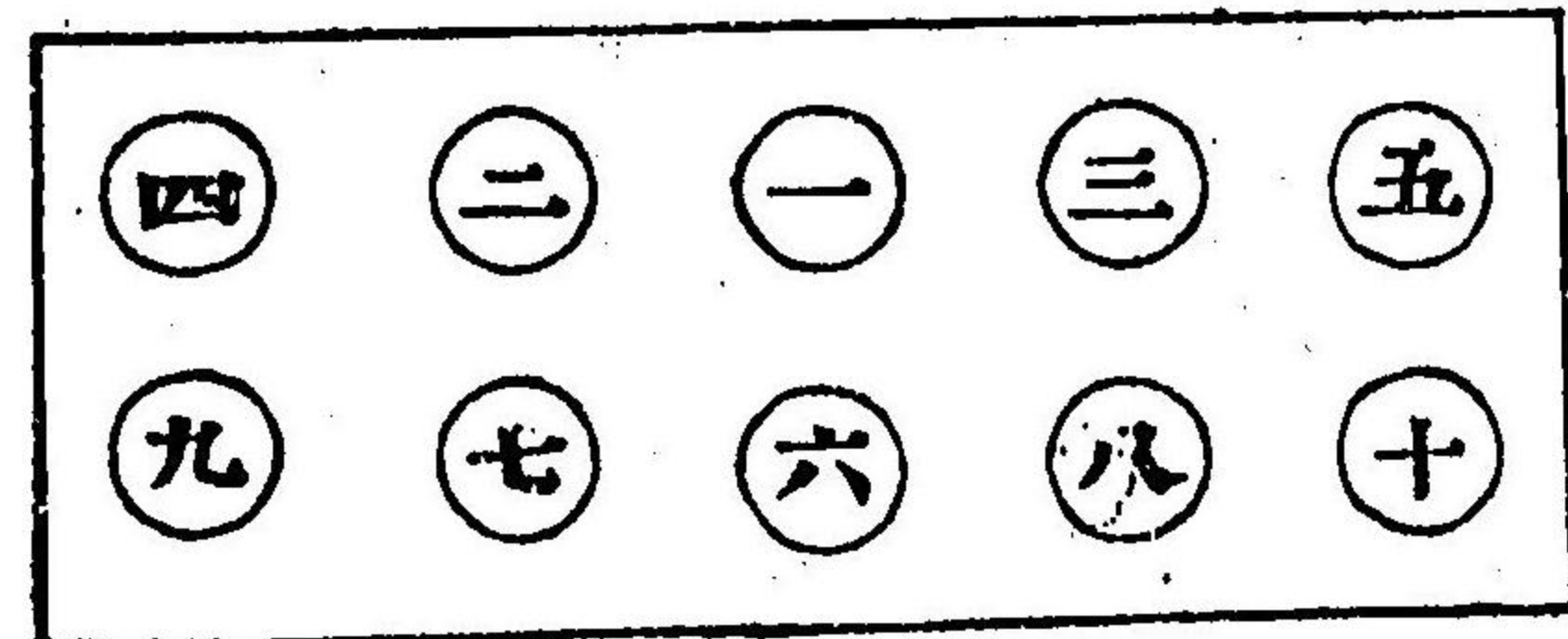
- 一ニ 和稻 荒稻
- 二ニ 酒
- 三ニ 餅
- 四ニ 海魚
- 五ニ 川魚
- 六ニ 野鳥
- 七ニ 水鳥
- 八ニ 海藻
- 九ニ 野菜
- 十ニ 時菓
- 十一ニ 作菓
- 十二ニ 水鹽

神殿に供へ獻る順序は左の如し

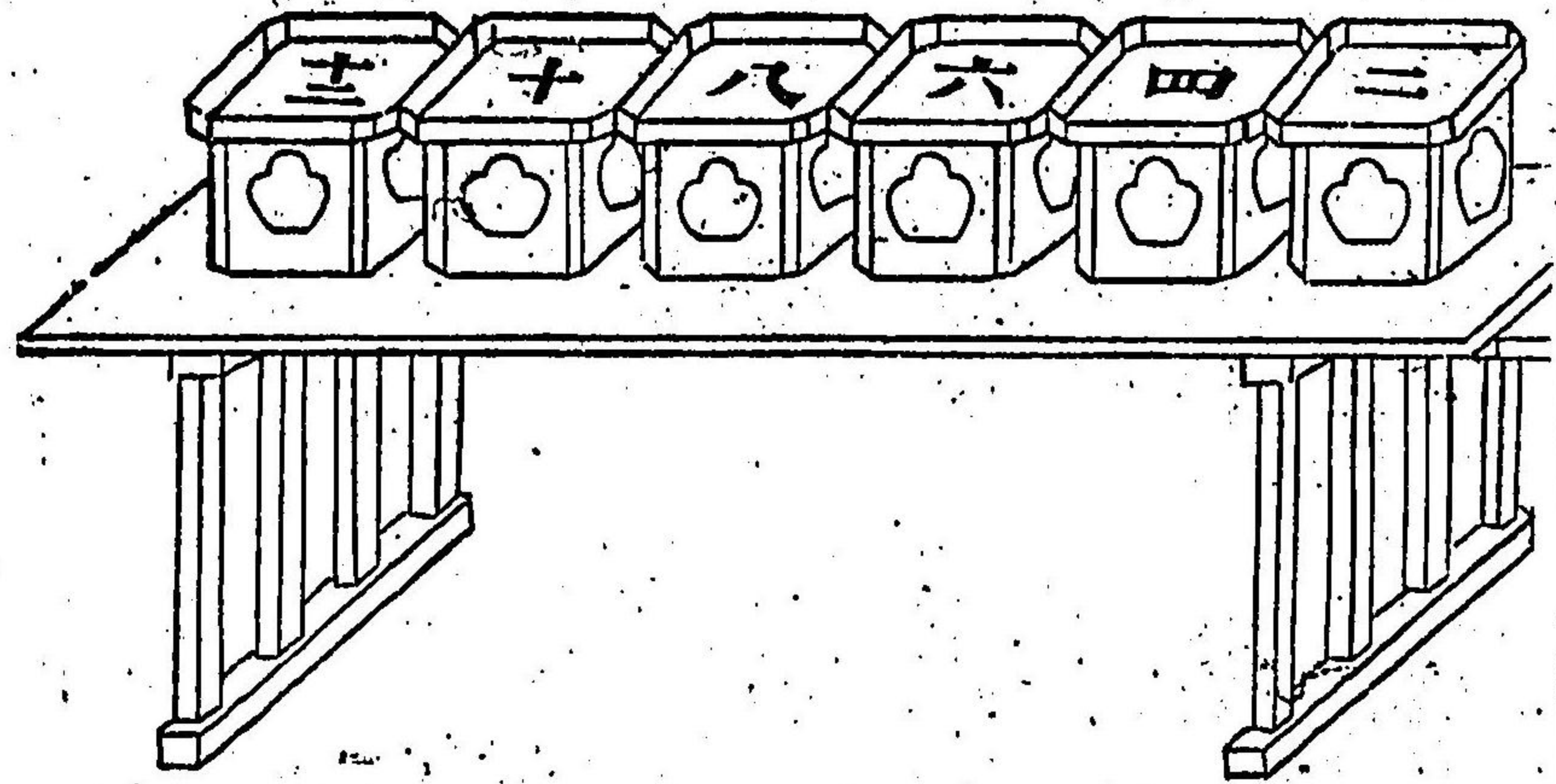
二十臺獻供



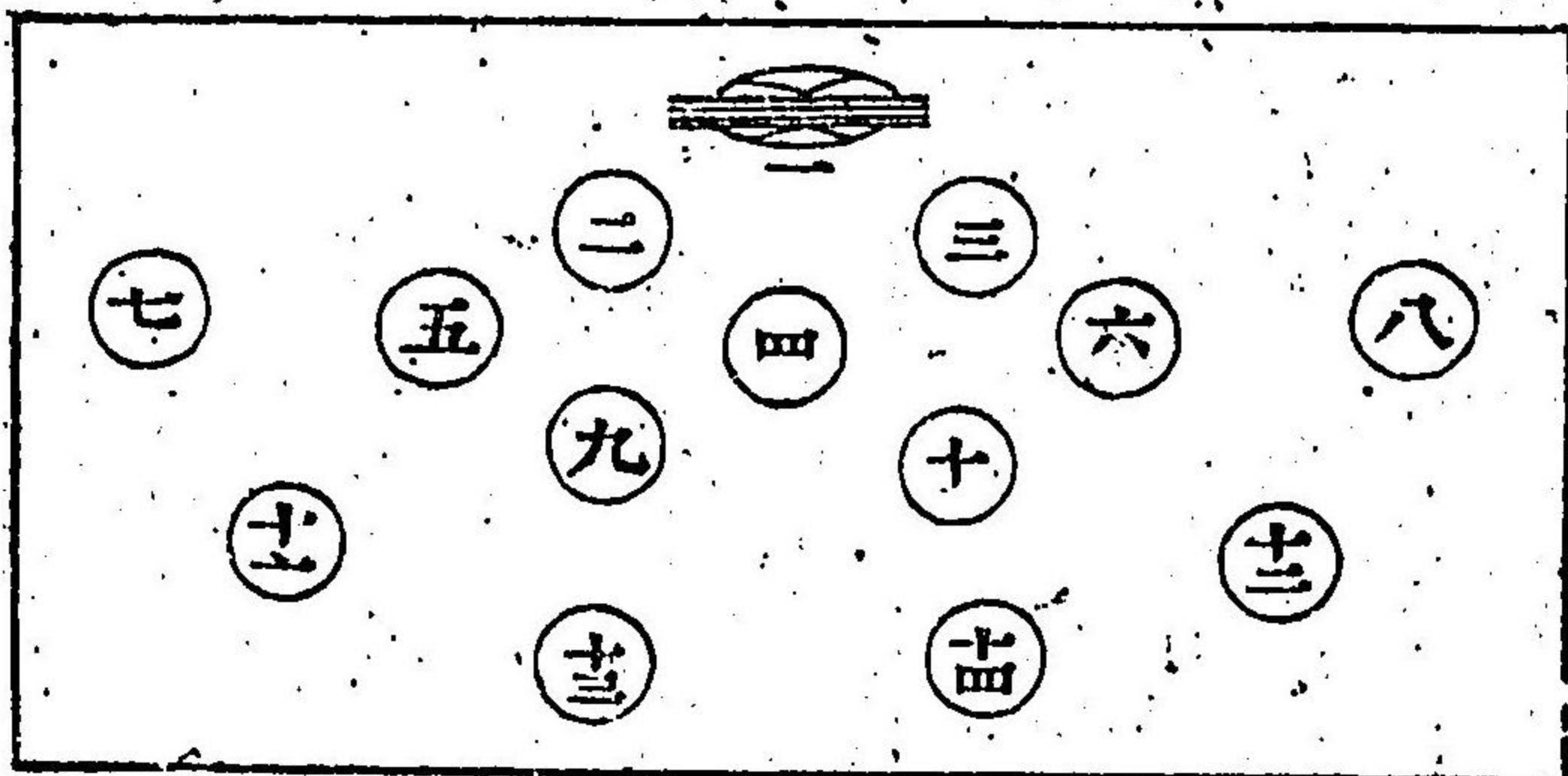
十臺之圖



順序圖



四十臺圖



魚肴を獻るよ川背海腹と云て川魚は背の方を神前

2 向け。海肴の腹の方を神前より向けて献れよ。○傳供畢  
 らば末席の手長より覆面脱ぎ。座揖してより起ち我圓  
 座或り下の方より復し。下足座して座揖する事。皆同  
 くせよ。○神饌を撤する時神饌係の者乃進退か又はよ  
 同くせよ。然きども覆面を用ひよ。神饌を撤する順序  
 か十二臺なれば。はつ十二より撤し始り十一十九八七  
 六五四三二一と逆よ撤せよ。次よ神饌案も撤すべし

神饌器持方之條

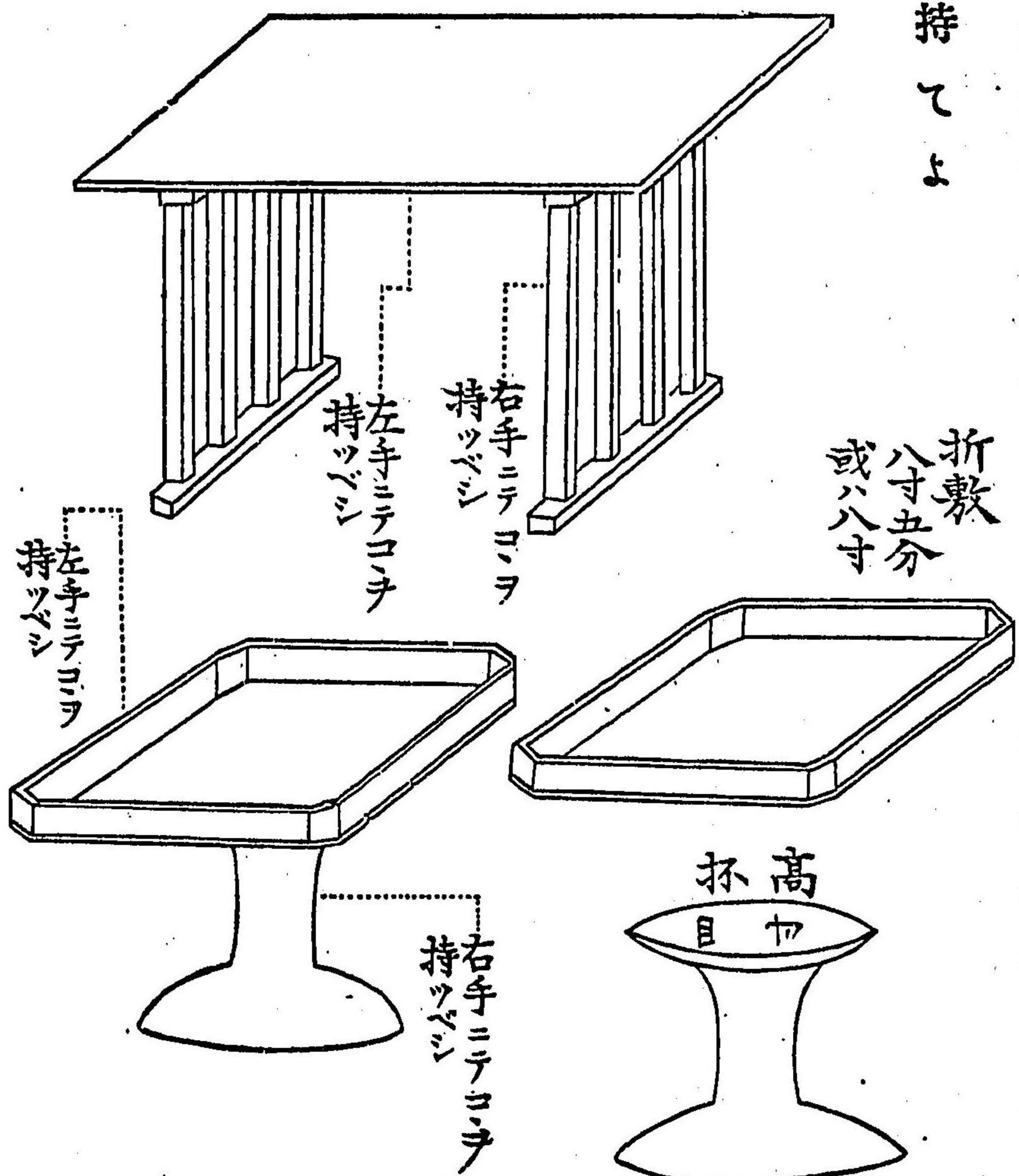
凡、神饌器の持方は下の圖を見合せて持べし。然きども三方

は大母指オモササ食指ササとふちよかけ。中指ミササ無名指ナメササ小指コササの穴の處  
 へ懸る持てよ

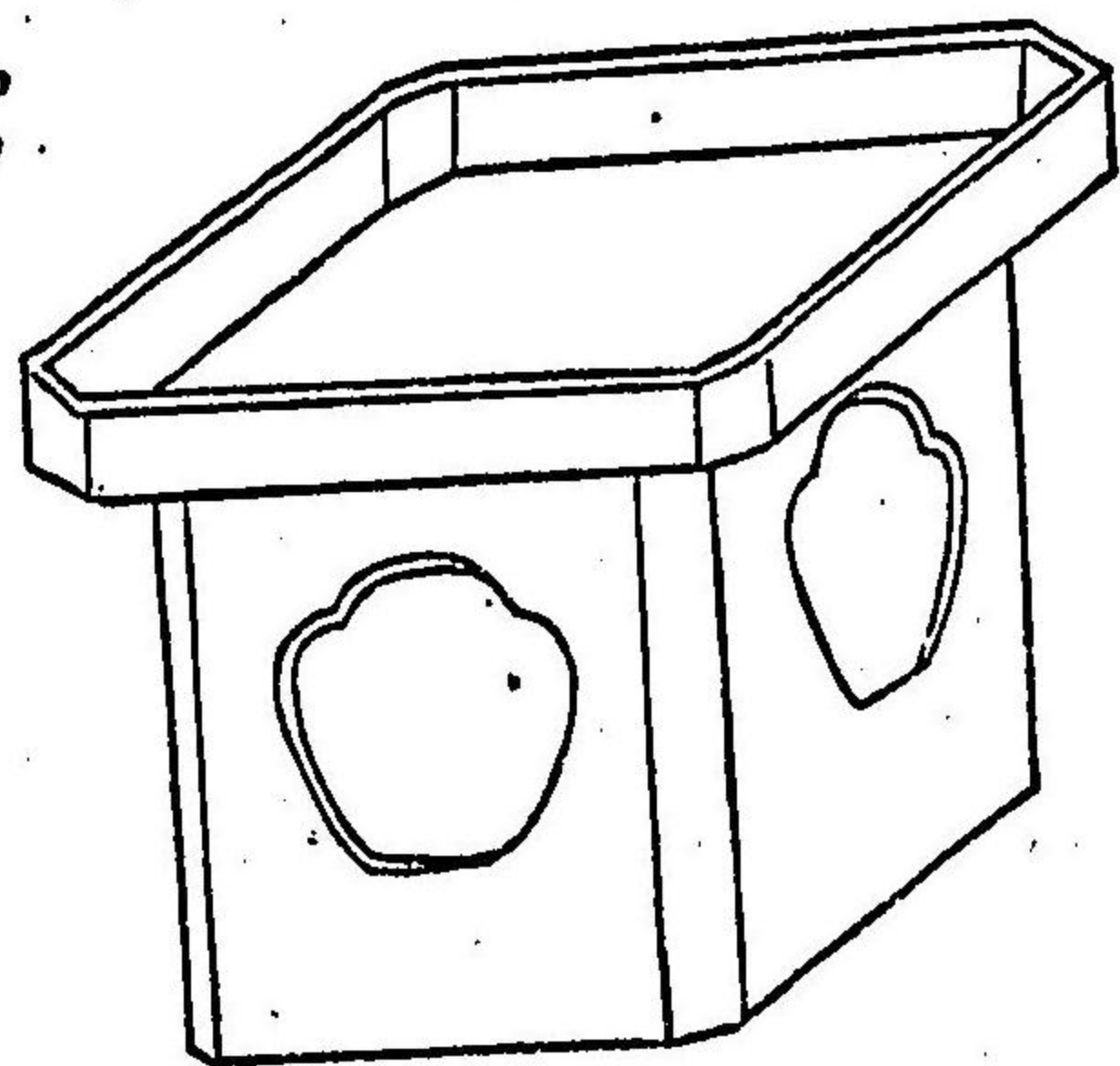
折敷  
八寸五分  
或ハ八寸

高杯  
目ヤ  
目ヤ目ヤ

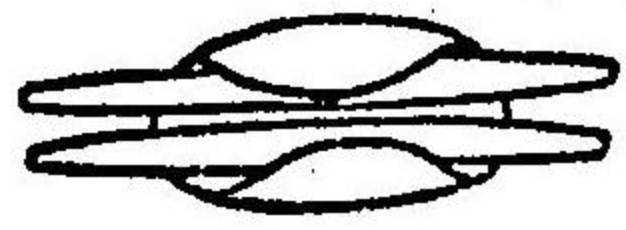
神饌案  
 高三尺  
 長五尺  
 廣一尺  
 然トモ  
 高長ハ  
 本社ノ  
 廣狹ニ  
 從フベ



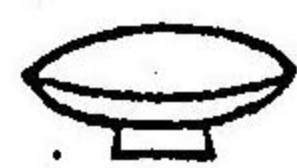
三方臺 一尺二寸  
或ハ一尺



耳土器

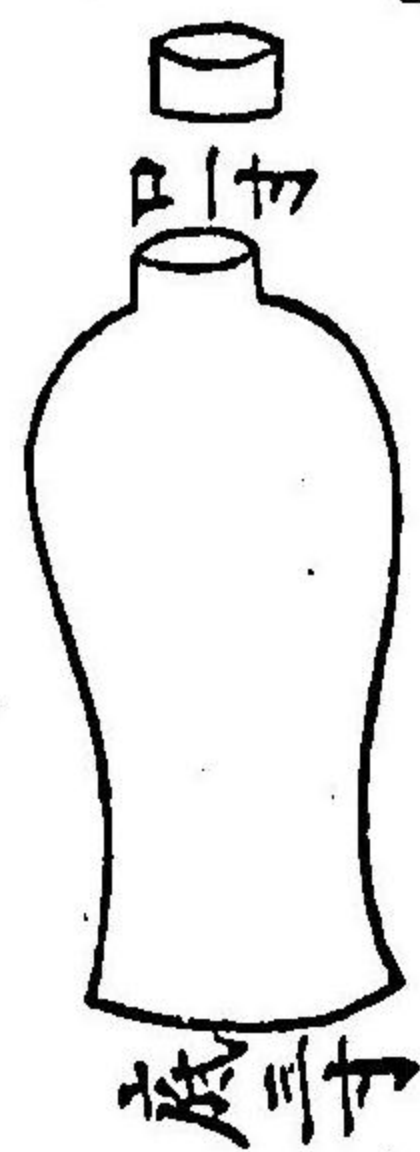


盃



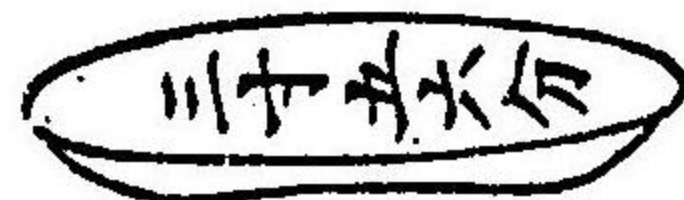
瓶子

高七寸

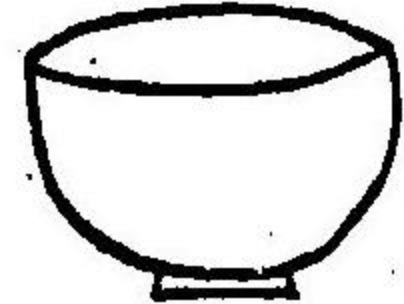


右手ヲヨコニ  
アテテ持ツ  
左手ニテヨコニ  
持テ送ル

皿



盃



高三寸

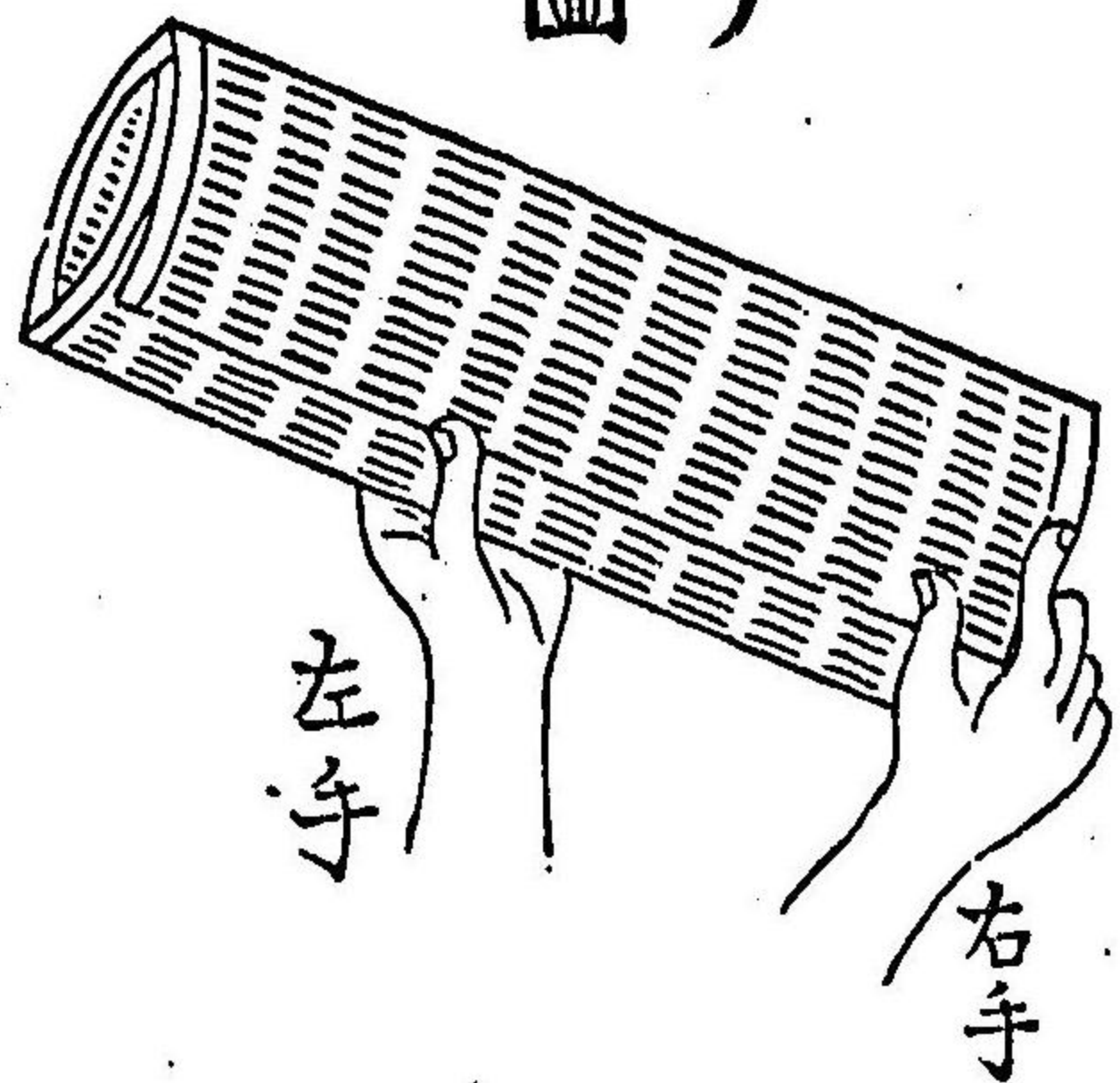
又高坏三方もかくして手よ持て献る時ハ。瓶の持方よ  
同くせよ。○瓶を献る時ハ蓋を取こと忘るべからず

### 奉幣式之條

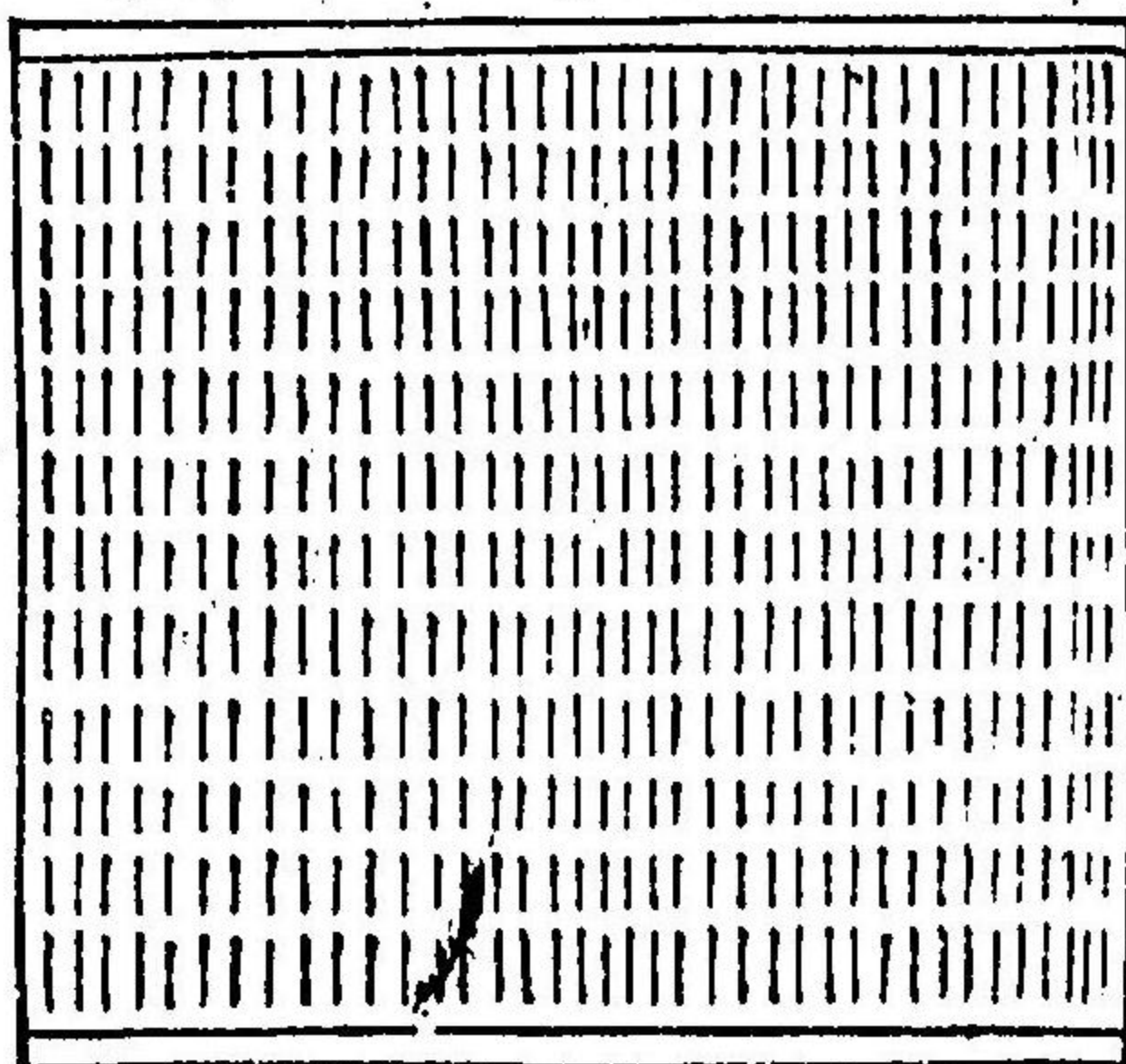
凡、神前よて奉幣するに、まづ、後取奉幣座を三に折り圖の如  
右へ開け敷き、  
座掛して退く。

### 奉幣座

帖ミテ  
持出圖



開ケ敷ケル圖

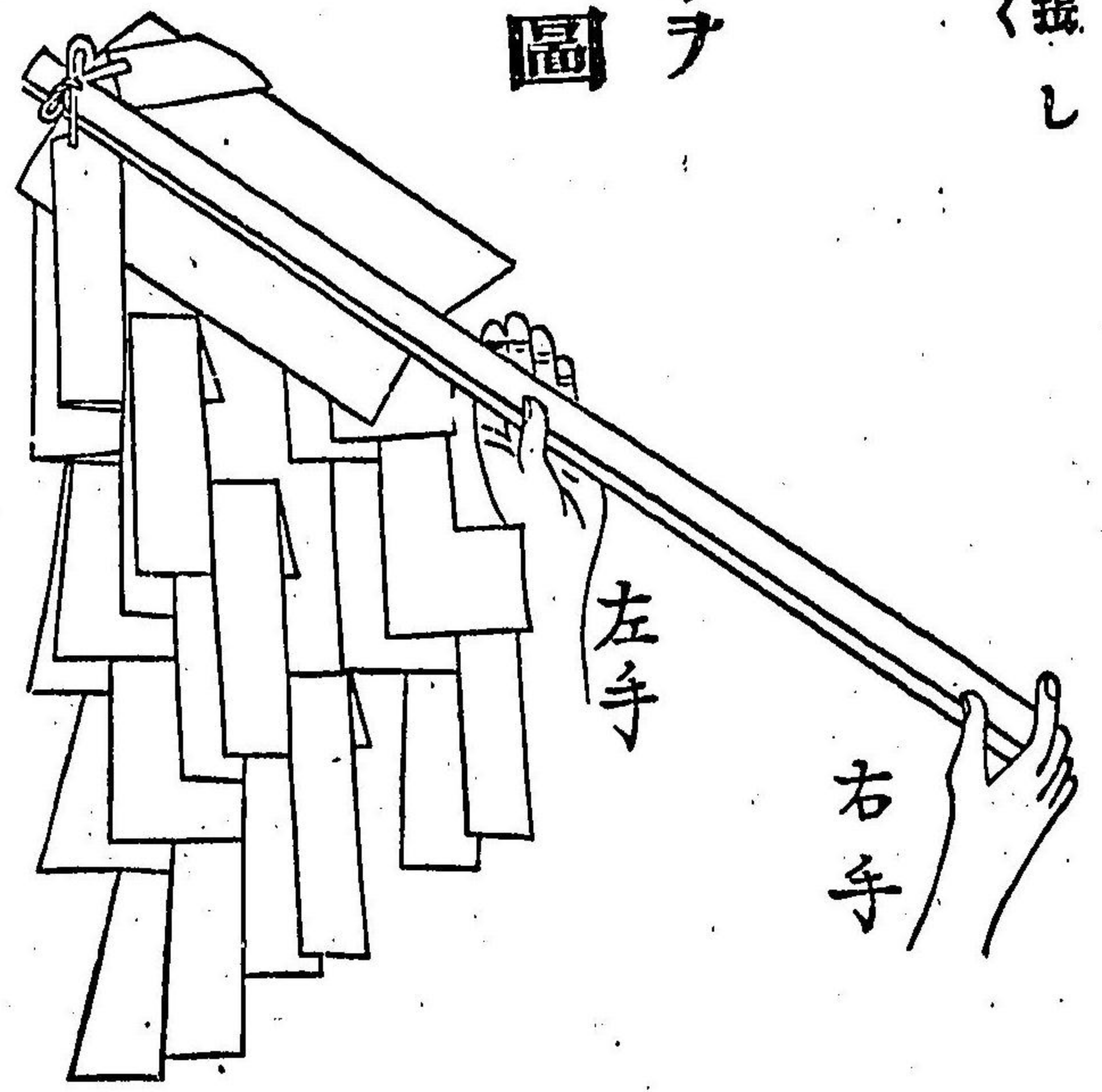


凡三尺四方  
縁ハ白ノ布  
又ハ木綿チ  
附セシ此ハ  
祝ノ座祝詞  
ノ座皆同マ

先奉幣司一揖 奉幣司ハ  
副齋主也。座掛して  
進み少し後へ控へて一揖す  
次着座一揖 左足座し膝行そ凡

つ三して座の中央に着きて座搦す 次二拜乍居 居かから正  
 筋して二度拜すを左手に幣使(幣使の後取也)幣申にて七分位左の  
 居方を幣申に上替て(奉幣司をの手に下持に方し右手に同上し奉幣司の左傍に  
 てし。座搦し

奉幣ヲ  
持出圖



之 簾座  
圖

奉幣司

幣使

次執幣再拜 奉幣司座搦して笏を右の傍に置き左手に幣

申の七分位の處を取り右手に幣申の本を持ちより足起ちて足

次左右左と引きより足座して幣申を左肩に宛て立て、拜し又

幣を持ちかからより足起ちて足を右左右と引きより足座して幣申

を右の如く立て拜す 次祈請(幣)を元(幣)の如く持直し

頭を垂れて心中に祈念す 次再拜(幣)を右足より起ち

て足を左右左と引きより足座して右の如く拜し又右足起ちて

足を右左右と引きより足座して拜す 次幣を使ふ附して一

揖 奉幣司幣を持替て幣使に授け笏を持て座搦す(幣)使受取て(右)

足より起ち神前に若き進み左足より座し膝行 次使返祝詞 使幣  
 奉幣司の左傍へ進み 次之れは應ず 奉幣司笏を右傍へを  
 居し手次一つ拍つ 次之れは應ず 奉幣司笏を右傍へを  
 き手を一つ拍つ如此するものと二度ち幣使座に揖して起 次二拜  
 乍居 奉幣司笏を執りて居なから二度拜す 次一揖起座  
 座揖膝退三つしてより足起つ 次一揖退下 一揖して本座  
 に復しより足座して座揖と奉幣取進み撤す揖して  
 奉幣の神饌と共に撤却し。或は便宜の案上よりおくも  
 妨かす

### 祝詞奏上式之條

凡、祝詞を奏するよの折まつ奉幣取座祝詞の座(奉幣座)に左右へ開け三、敷  
 てき座揖し 先一揖 齋主 座揖して座をより足起ち祝詞座の前  
 少し後へ控て一揖と 次着座一揖 左、足座し膝行三つし  
 て祝詞座の中央に着て座揖すにこして後取祝詞を奉幣持につ如  
 し居て退くこと持替て奉幣主の式に同し揖

### 祝詞ヲ 持出圖

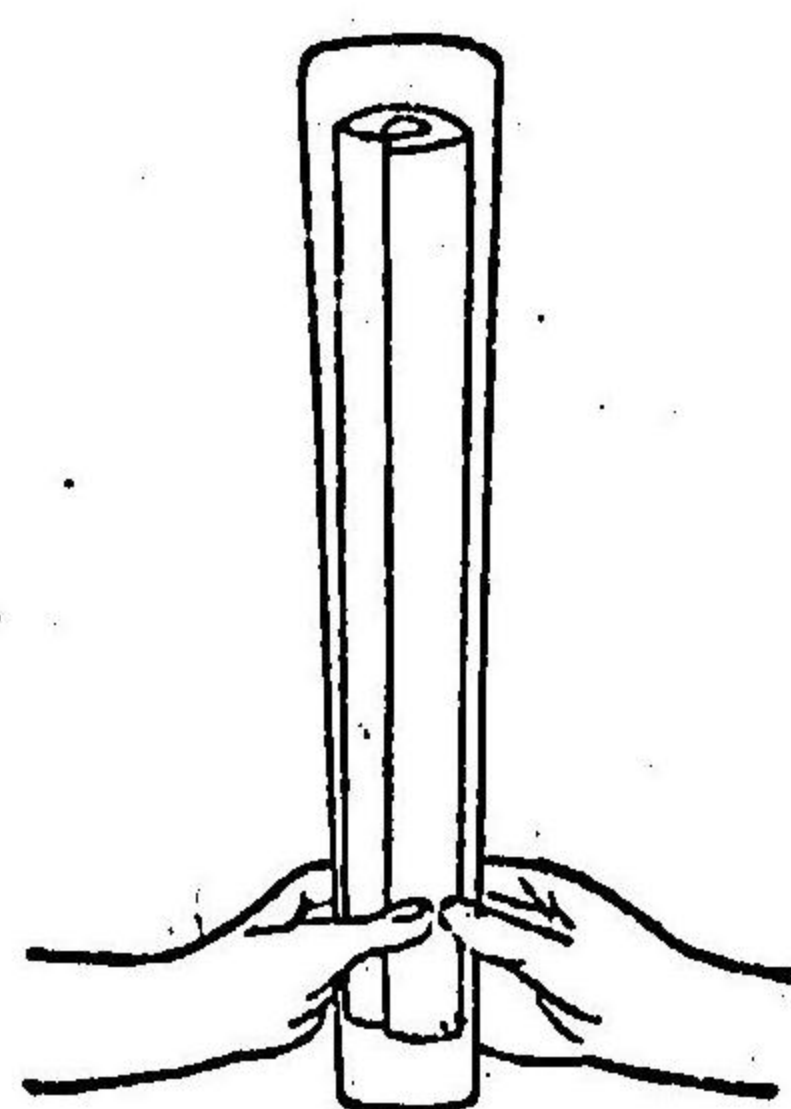


### 着座 之圖



次再拜 齋主座揖して祝詞を左手に取り笏に持添へ兩手に捧  
 け祝詞は笏の頭よりて二拜すること圖の如し

祝詞を笏に取  
 添へて持つ圖



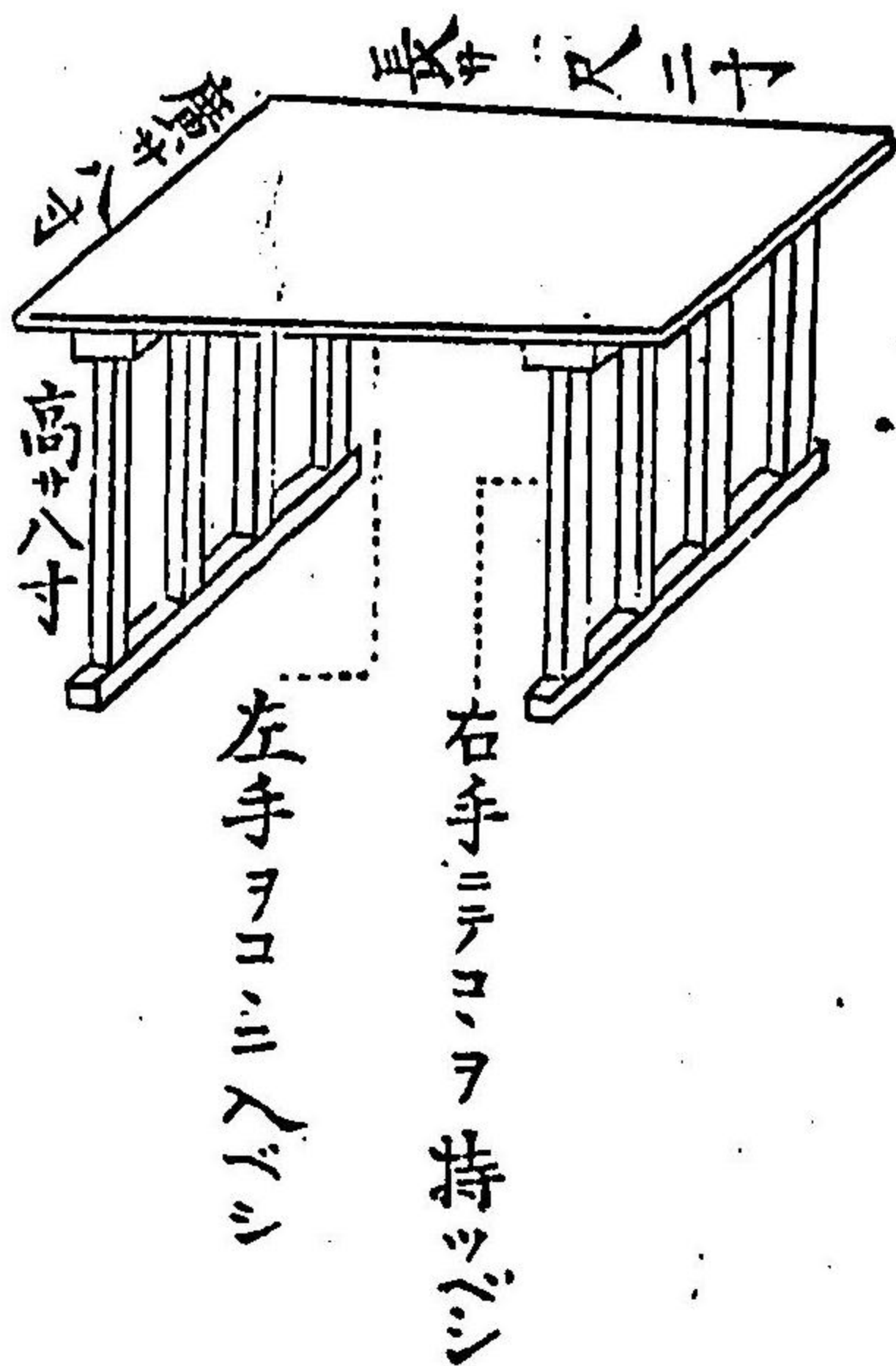
次祝詞を奏す 伏各平 笏を右の傍におさし祝詞を左の傍にて  
 開き正面に捧げ音聲明亮に讀む 次再拜 讀了りて左の  
 傍にて巻き笏に持添へて二拜す 次拍手 祝詞を後取に  
 授け本座に復取す 笏を右の傍におさして手を二拍つ 次一拜

笏を持って一拜す 次一揖起座 座揖膝退三つしてより起  
 つ 次一揖復座 一揖して御座の傍に座して座揖す 後取進  
 をして撤す祝詞座

玉串献と條

凡、玉串を献るよのしまつて後取出て玉串案を神饌案持して如く

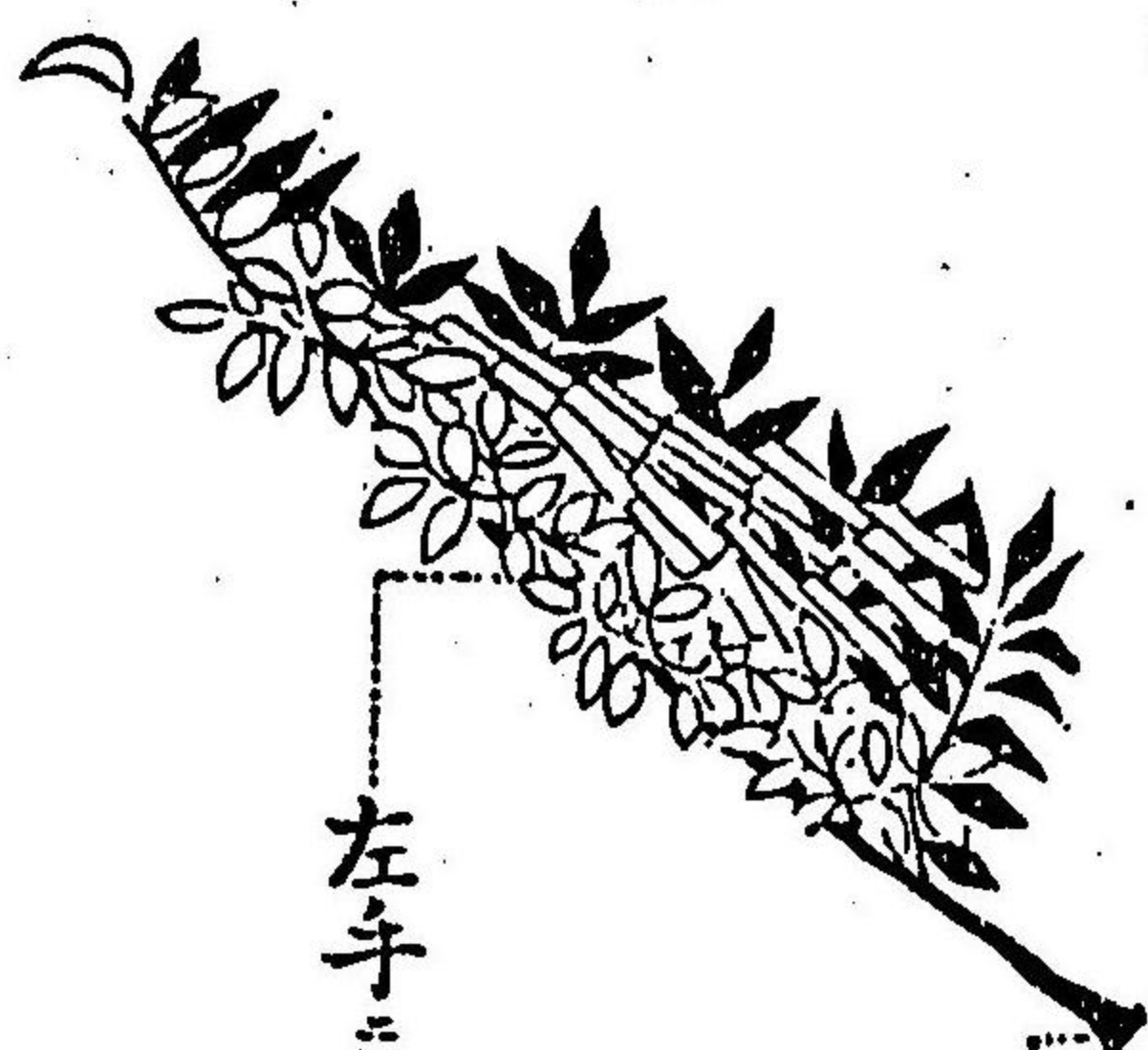
玉串案  
 之圖



先一揖 齋主 座揖して座をより足起ち玉串案の前凡三尺位隔  
て一揖してより座すを上にに後取玉串を下ににして奉幣持出つ如く(左手  
左傍に居し)て持替(右手を上に退くし左  
手を下に退くし)

玉串

榊枝長凡一尺五寸



左手ニテコナ持ビシ

右手ニテコナ持ビシ

次着座 齋主座揖して玉串を左手に取り膝行三つして玉串  
案乃前に着く 次玉串を獻る 笏を右の傍よおき玉串を  
持替の榊の本を神前へ向けて右手にて案上おをく 次一拜

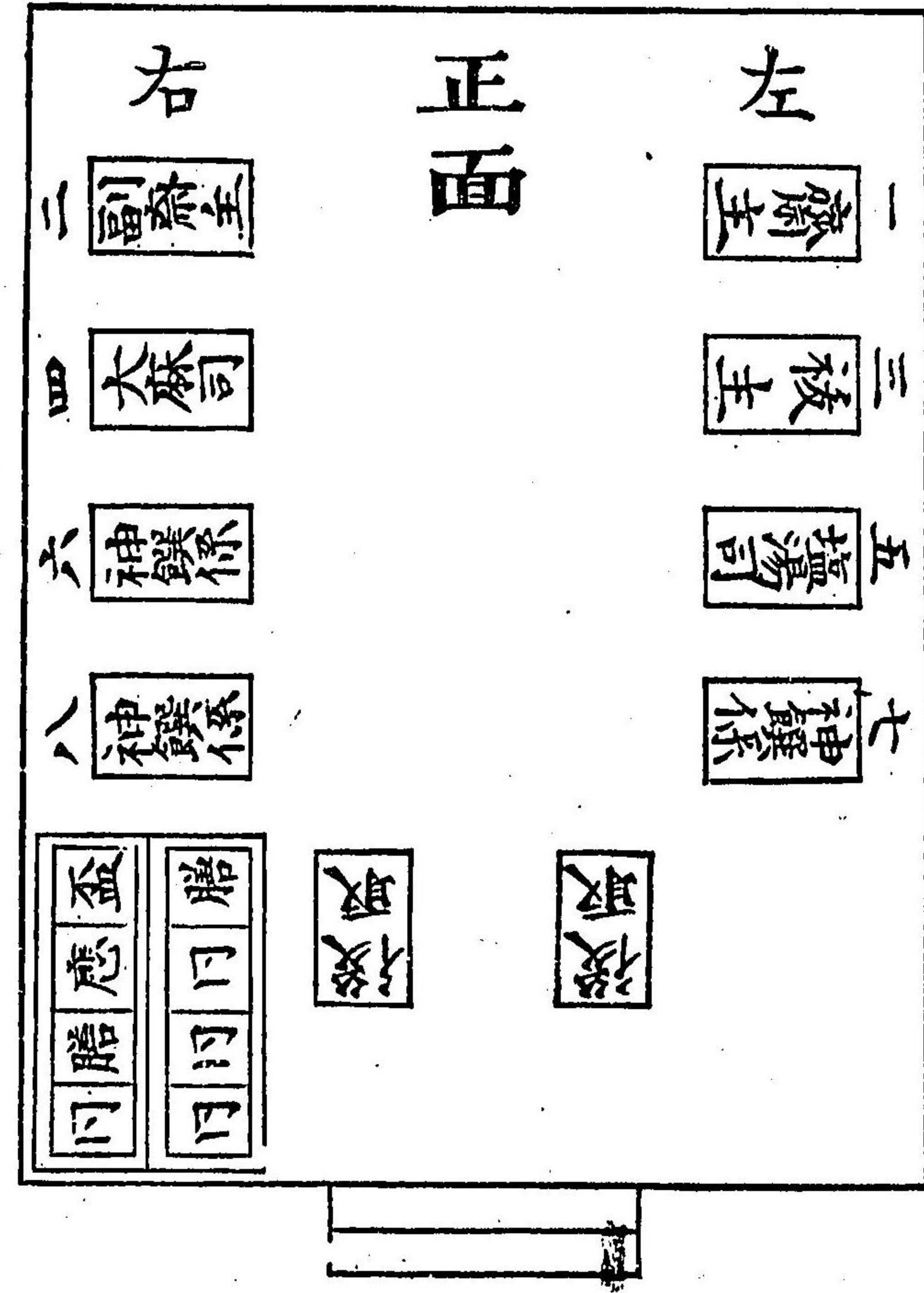
笏を持って一拜す 次一揖起座 座揖膝退三つしてより足起  
つ 次一揖復座 一揖して御屏の傍に座して座揖す  
次 副齋主以下同上 副齋主以下一同或ハ二三人宛各自  
に玉串を持ち神前に進み献て拜するぬと齋主の所作に同し  
退二人も以上右なる人に見做ふすべし 進  
玉串は神饌を撤する前よ。後取一人進み出て案と共  
に撤すべし

直會式之條

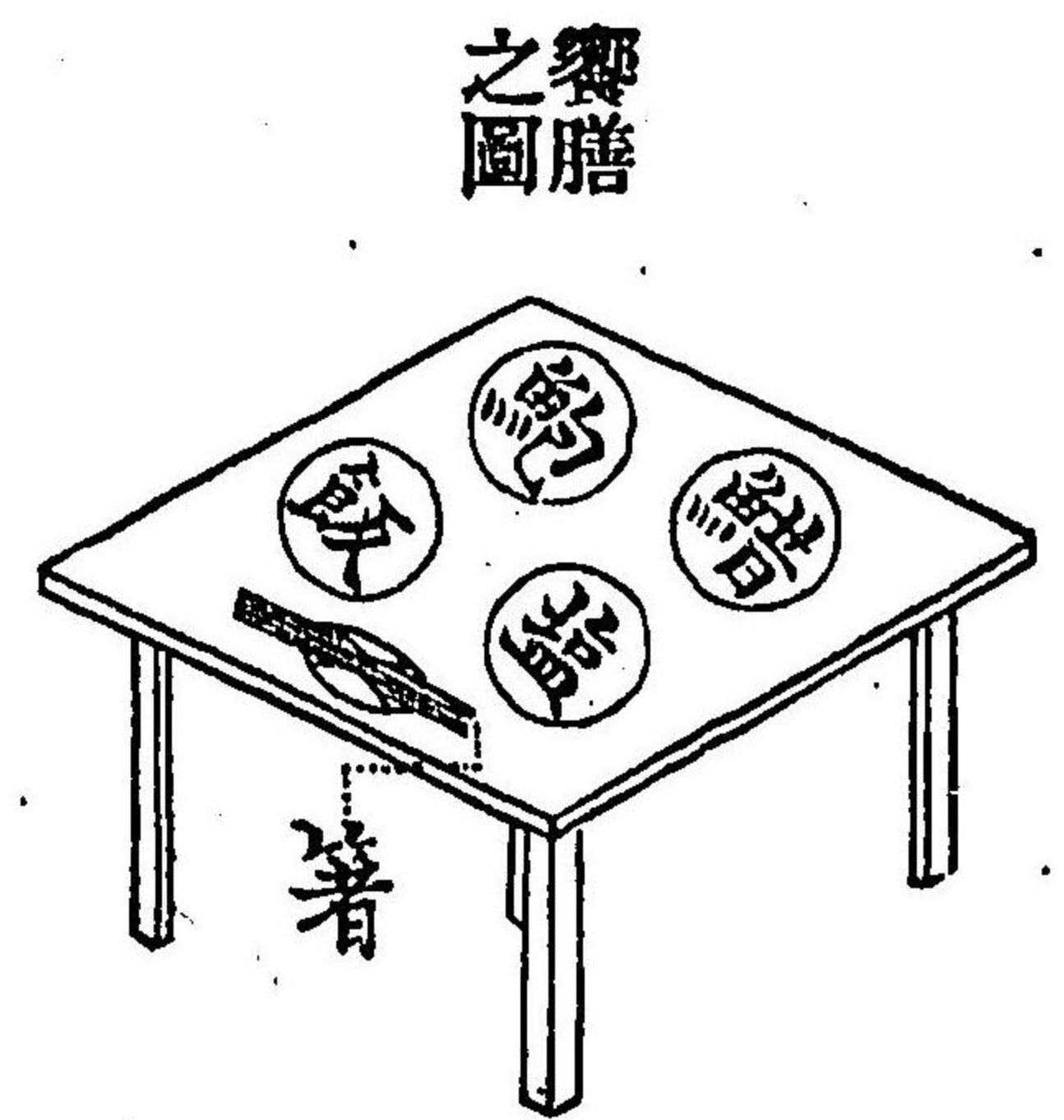
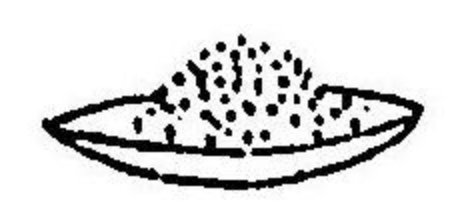


凡、直會の祭祀の事全く畢て齋主以下各祭場を退き。直會殿に至り座より着くこと圖乃如し。若し直會殿なる所にて行ふ

直會座席圖



先安座 齋主以下各座につかば安座すべし。俗に云くぬぐ。次饗膳 直會禮當の後取各員の座前に饗膳をすゆるみど圖の如し。



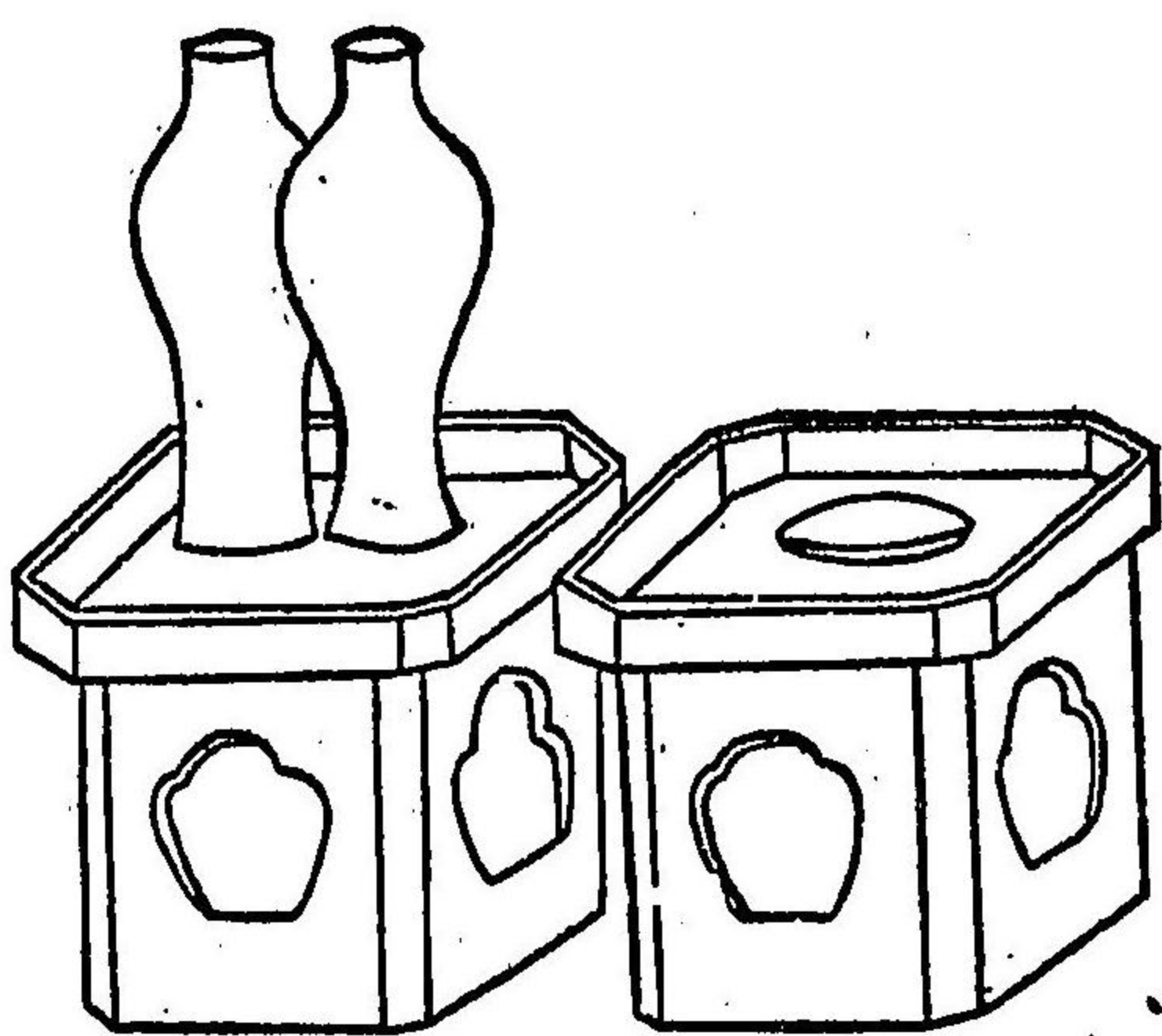
次箸立 各員箸を飯の上にかけるみど圖の如し。

鹽ハヘソカソ  
ラケロ盛ナリ

肴ハ時宜ヨ  
從フニ

臺ハ四  
足机ヲ  
用ユ

次勸盃後取二人 一人の盃を載たる三方杖持ち。一人は眼を載たる三方を持ち出て。齋主の座前に就きて三方をすゆること圖の如し



齋主盃を取加く酒を三方受けかき飲み。傍の喰ふへ次に二人の後取三方

を副齋主の座前にすゆ副齋主盃を受け肴しを如此順次に末席へおよぼす 次二獻 初獻に同し 次發歌 歌は「あのみみうさなひら或はやま遊などするものよろし哉歌の時の宜さに従ふべし 次三獻 上にをなじ 次箸拂 飲食畢れの箸を元の如く耳かわらけにおくあり 次撤膳 後取盃眼の載たる三方を引き次に膳をひく 次退手一揖各 笏を下に置いて手を二拍ち笏を持ちて座揖す 次退散 齋主より座揖して起ち直會殿を退くに以下各これ祭官少なき時の略するも妨ならるべし

府縣鄉村社祭典式卷之下終

明治十九年六月十七日版權免許  
同二十年一月 日出版

定價金壹圓八拾錢

編輯兼  
出版人

兵庫縣平民  
表米神社祠掌

北垣 彌

但馬國鞆郡竹  
三百六拾番地居住

北垣彌  
版權免許  
所有

大取次  
發賣所

京都新町通・三條上ル町

池村久兵衛

大阪東區北久太郎町四丁目

柳原喜兵衛

販賣書房

西京寺町通御池下ル 佐々木惣四郎

同 寺町通四條上ル 田中治兵衛

同 三條通寺町東入 福井源次郎

同 杉本甚助

同 川勝徳次郎

東京日本橋區橋町 皇典出版舎

尾州名古屋玉尾町三丁目片野東四郎

大阪心齋橋本町北へ入 赤志忠七

大阪心齋橋安土町南入 鹿田静七

同心齋橋南久寶寺町北へ入 前川善兵衛

同 道頓堀 藤原熊太郎

播州姫路後町 伊藤和七郎

